

---

# 十二のBSIS

@mia

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十二のB S I S

### 【Nコード】

N 3 5 3 7 Y

### 【作者名】

@m i a

### 【あらすじ】

日本とロシアのハーフである主人公が特別なI Sを乗り回し色々とする話。

姉との因縁、女ばかりの学園、迫り来る様々な敵……。

主人公はこの学園でどういった青春を送るのか！！

## 設定集（前書き）

B S I Sを読むにあたって、分からないことが色々あると思うんでオリジナル設定のところだけでも記載することに。

ちなみに、後に出てくるI SのスペックD A T Aはあくまで私の想像でしかないのであしからず。

（H 2 3 ・ 1 1 ・ 2 3    D A T A更新）

## 設定集

日崎ヴァディム

国籍 ロシア

性別 男

身長 176 cm

誕生日 五月一日

髪型 セミショート（色はアッシュグレイ）

瞳色 碧色。

日本（父親）とロシア（母親）のハーフ

母親は元代表候補生。

父親はIS専用プログラマー。

世界でISを扱える二人目の男子。

3

性格は明るめ、女子にも男子にもこのまれそうなタイプ。

一夏の同居人である。

一夏同様に専用機持ちだが候補生でない。

【イズムルート・フスプイシカ】（翠玉の閃光）

ヴァディムの専用機。

機動力は世界トップ5の中に入り、特に加速度においては世界一。

速さに重点を置いているので、近接武器の扱いに長ける。

さらに誕生石のコアによる補正で一瞬ながら音速を超える速さで動くことも可能。

誕生石【エメラルド】を持つB S I S。

スペックDATA

攻撃力B (近接S 射撃C)

防御力B (機体B 回避A)

燃費B

機動力S (最高速度A 加速度S)

熟練度C

特殊性能C (一覽・連続瞬時加速・絶対回避)

総合戦力B

#### 搭載武器一覧

・ヴェーチエル、リョートウ

部類 ツインダガー

非実体武器

ヴェーチエルは【風】、リョートウは【氷】を指す。

刃渡りは約50センチにも満たないが、二つを合わせて長くすることが可能。

さらにエネルギーを増幅することでも刃の調節が可能

・翡翠

部類 日本刀

実体武器

刃渡りは約1M、ISが用いる日本刀の中では短い方。居合をするために鞘も展開することが可能。

スィー・イー・フリーヤ

・灰色の嵐

部類 二丁拳銃

実体武器

何の変哲もない自動式拳銃（イメージとしてはマカロフPMをIS用にしたもの、さらにイズムルート用に改良したもの）、生身の人間でも携帯できる。普通の拳銃より威力が爆発的に高い。

一マガジンに八発

特殊性能一覧

マルチイグニッションブースト

・連続瞬時加速

瞬時加速を連続して行い、不可能かと思われた曲線行動が可能となっている。

しかし、曲線行動はエネルギーを大幅に消費するため、ヴァディムはあまり好んでない。

直線行動と完全停止の繰り返しを行うことで、相手のセンサーの錯乱をすることも可能。

・絶対回避

シールドエネルギーを消費することで、実体非実体に関わらずほぼ全ての攻撃を避けることが可能。

が、普通に受けた方がエネルギーの消費が少なくて済むという機会がすくなくないので、使い所は考え物。

誕生石のコア

世界に十二しかないB S I Sのコアで、その名の通り十二の誕生石がモチーフ。

それで作られたISはBSISと呼ばれ、それらはどの国にも属さないが、原則その所有者の国籍のISとして扱われる。

が、国家が実験などに使うことは東博士が全禁止している。

コア自身に自我があり（いまだ会話が試みられたことはない）、操縦者を選ぶ。

機体は既に製作が終了しているがいまだに操縦者が現れないコアも何個がある。

普通のISの用に成長していくので、完成はないとされている。

誕生石のコア一覧《内は所有者の国籍

一月

二月

三月

四月

五月 エメラルド《露》

六月

七月 ルビー《日》

八月

九月

十月

十一月 トパーズ 《無》

十二月

## プロローグ

「母さん。俺、ようやくスタートラインに立てたよ」

母さんがいなくなつて、もう七年が経つ。同時に、姉さんを恨み続けて七年が経つ。

あの夜、姉さんは俺を殺さなかった。あえてそうしたのは明確だった、姉さんは誰よりも“喜劇”を楽しむ人だった。

母さんを殺して、尚且つそれを“喜劇”の始まりと叫んだ姉の顔は今でも忘れられない。

IS……。母さんが好きだった物、姉さんが殺しの道具として使った物、そして何よりそのISで、俺は姉さんに打ち勝つ。

まさか、俺までISに乗れる日があるなんて思いもしなかった。しかも専用機まで用意されているとは、父さんに感謝しないといけない。

日本人でありながら、ロシア軍のISプログラマーをしている父さん。七年前に作った父さんの二つ最高傑作の内、一つは姉さんがもう一つは俺が受け持った。

当初から、俺が受け持つ予定だったらしいがいかんせん動いてくれなかった。



母さんのコアを使うまでは。

死ぬ前までロシア代表生だった母さん、その母さんのISの主力武器であったツインダガー、“ヴェーチェル風の刃”と“リョートウ氷の刃”を待機状態のISに添付する。

ロシアの“ヴェーチェリオ・リョートウ凍える風”、それが母さんの二つ名だった。

“イズムルート・フスプイシカ”

ロシア語で“翠玉の閃光”と呼ばれ、機動力に長けた近接戦闘万歳な俺の相棒だ。

待機状態のイズムルートは、ペンダントとして俺は身につけている。自分の誕生石でもあるので、何故だかはわからないけど安心感がある。

「母さん……。俺、そろそろ行くよ」

最後に母さんとの思い出を少しだけ思い出してから、俺はこの家をでた。

プロローグ

くオワリノハジマリく

インフィニット・ストラトス

IS、それは世界のどの兵器よりも総合戦力で勝る兵器であることは、既に証明されている。

何故か女性だけが扱え、男性にはピクリとも反応しないらしい。にも関わらず、世界で“唯一ISが使える男子”それが、織斑一夏だった。

今回はラッキーとしか言いようがない。秘密裏で行うには限界があるし、ISが使える男子が一人でたっても数人いてもおかしくはないはず。

怪しまれるのを防ぐために、少し転校を遅らせる必要があったが、まあいいだろう。

「じゃあ、行ってくるよ」

誰もいない家にしばしの別れを告げて、俺は家を飛び出した。

ここからIS学園までは電車で一時間程かかる、徒歩の時間を含めると一時間半になる。

今回はIS学園から迎えがくる手筈がついていたので、気が楽なはずだったんだが……。

何故か家の前には黒塗りの外車が止まっていて、それはこの空間には異質なものだった。

俺が啞然としている内に、後部座席から一人の女性が降り立った。一目みてただ者ではないという気配を感じとった俺は、思わず警戒体制をとってしまった。

「やあやあ、気が日崎ヴァディム君だね。その体制は正解だけど、今は下ろして……ね」

顔と声は笑っていたが、眼は笑っていなかった。

「あ、はい。すみません」

「意外と日本語流暢なのね」

俺が警戒体制をとった途端に、ようやく自然体を見せたこの女性は専用機保持者みたいだった。

「えっと、どちら様ですか」

「私は更織楯無、IS学園の生徒会長であり学園の長」

凜、とした立ち振る舞いで会長は続けた。

「つまり、学園では最強ってこと」

更織先輩、と言おうとすると楯無でいいとのことだった。

「楯無先輩はどうしてここにいますか」

「ん、私はとある任務の帰り。折角だから転入生でしかも男子な君を一目見たくてね」

それから視線を上から下に移動させて、また上に戻す。

「ふうん、面白いね」

「一体これで何かわかるんですか」

答える代わりに先輩は微笑みを返し、それについては何も言わなかった。

「ささ、早く乗った乗った」

楯無先輩に背中を押されて、黒塗りの車に乗る。中は見たことないぐらい広いし、座席もかなり高級そうだった。

「すごいですね、この車」

「まあ、君はお客さんみたいなもんだからね」

それからも色々と会話しながら、しみじみと高級車の感覚を味わっていた。

これから、新しい日常が始まる。そう思えるだけ、今は楽しめそうだったことだな。

## プロローグ（後書き）

えつと、@miaです。

以後よろしく願います。

……アニメもだいぶ前に終わったし、原作はもう半年も出てないし、  
需要ってあるのか？？

いや、私の需要がある（笑）

次回からさっそく戦闘に入っていきますよ。

## 第一話 翠玉の閃光

「皆さん、今日は転入生を紹介します」

「またこのクラス？」

「今度はどんな可愛い子かな」

「きっと候補生なんだろうね」

「静かに、それでは紹介しますね」

教室のドアを開けて中に入る。すると、教室内が一瞬静かになる……が。

「」「きやああああ」「」

と思うと大多数の女子が騒ぎ始めた。

「えっ、何。男じゃん」

「織斑君だけじゃないの？」

「しかもまた美少年」

この教室の騒ぎに一切動じないのが一人だけいた。

「お前ら、静かにしろ」

織斑千冬、織斑一夏の姉であり、元チャンピオン。

「織斑……千冬、さん」

「ん、流石に私は知ってるか」

話を聞くとところによると今はここで先生となっているらしい、てか、先生だ。まあ、妥当なところだろう。

優秀な選手ほど優秀なコーチはいない、と俺は思っている。

「さて、自己紹介をしてもらおうか」

軽く返事をしてから、教卓に向かう。そして黒板に自分の簡易プロフィールを表示させてから、自己紹介をする。

「えっと、名前は日崎ヴァディム、歳は十六。母さんはロシア人で、父さんは日本人。一応世界でISが使える男子ってことになってます」

最後によりしく、とだけ付け加えると教室がまた沸く。

## 第一話

く 翠玉の閃光く

「えっと、日崎君だっけ」

「織斑一夏か、俺のことはヴァディム、呼びにくいならヴァンで」

「おう、俺のことは一夏って呼んでくれ。いやあ、これで男子三人目が来てくれて助かったよ」

「三人……？」

データにはそんなことは記載されていない、ISの部分展開してからデータベース検索を行ったが、結果は同じだった。

「やあ、僕はシャルル・デュノア」

「……日崎ヴァディムだ。あと、少しいいか？」

上を指しながら、二人に言う。

「屋上……ね」

「じゃあ、案内するよ」

シャルルは勘がいいのか、少し警戒体制になったようだが一夏は今だに普通のままだった。

「で、何を話そうとしたんだ？」

「僕も気になるよ」

「単刀直入に言おう。……シャルル、お前女だろ」



一瞬、二人の顔が引き攣る。

「どうやら、本当みたいだな」

「……それを知って、どうするつもり」

場合によっては、口封じの為に君を殺すよ。とても言いたげな視線で俺を睨んでいるが、まだ武器は出していなかった。

「別に、ただ確かめたかっただけさ。男が簡単に乗って良いようなもんじゃない、このISってのはな」

「え、そうなのか」

「ああ、多分一夏は束博士に選ばれたんだろうよ」

「ヴァンもか？」

「いや、俺はこいつ以外は全く動かせない。IS適性も『測定不能』だ」

「ラファールも打鉄も試してみたが、結果は同じ。この“イズムルト”だけが、俺を受け入れてくれていた。」

「ならどうして君は乗れるのさ、実は君も女の子じゃないのかな」

「別に証明しても良いんだぜ、一夏を呼んだのもそのためだ」

「むう……。分かった、信じる」

要らない想像までしたのか、シャルルの顔は少し朱かった。

「さて、今日の一時限目は実習だったよな」

部分展開させたISから情報を確認する、と共に時刻の確認。

「そろそろいかないとヤバいな」

「俺まだ着替えてねえよ」

普通は下に着ておくだろ。

「早く行くよ、二人とも」

全力疾走で更衣室経由でアリーナに向かったが、少し遅れてしまったので後に伝えられるであろう伝説の出席簿チョップを、早くも受けるはめになっていた。

「今日の授業は……そうだな、ヴァデーム」

「はい」

「ISを展開してみろ」

生徒から少し離れて、ISを展開する。

「あれ、ヴァンのISってなんか小さくないか」

「こつという設計なんだよ」

それもそのはず、この《イズムルート・フスプイシカ》最大の特徴は、等身大のアーマーを全身装甲の様にしている所だ。

だから、各身体のパーツ毎にピッタリフィットするよう生計された俺の専用機は、小さくなるのが普通なのだ。

機動力を高めるための、このやり過ぎ感がまた堪らない。

「よし、じゃあ誰かヴァディムと模擬戦してみろ」

「私がやりましてよ」

セシリア・オルコット。

イギリスの代表候補生で、専用機は“ブルー・ティアーズ”だっただけ。

「相手にとって、不足無し」

「なら、所定の位置につけ。生徒は観客席へ急いで移動しろ、5分後に開始する」

所定の位置までISでゆっくりめに飛んでから、最終チェックを行う。

大体各エネルギーはマックス近くまでチャージ済み、機体の反応も悪くない。

ちなみに、エネルギーは満タンにしない派だ。たくさんいれれば

なしってのはなんだか好きじゃない。

そんなこんなで、5分後。

『では、始めるぞ』

「いつでも」

『同じく、ですわ』

今回はカウントダウンは無しで、すぐに始めるのこと。

「覚悟はよろしくて？」

「……そんなことを言ってられるのも今の内だ」

「威勢だけは、褒めてさしあげましょう」

ム力つく奴だな、こいつ。

「時間も少ない、5分で決める」

「決められる、の間違いではなくて？」

ああやって高みにいられるのも、今の内……。力は使すべき時に使すべき形で使う、それが正しい使い方だ。

「一気にカタをつけますわ」

遠距離からの射撃攻撃、それが彼女の戦い方だった。あれだけの

装備を全発射しても“隙間”は必ず生まれる。

「……相手が悪かったよ、お嬢さん」

意識を一点に集中させる、そして瞬時に爆発させるイメージ。

全ては、一瞬だ。

「加速するぜ」

弾丸と弾丸の間をすり抜けて接近する、普通のISの様に無駄に幅広くないので、スイスイと進む。

既に弾丸のスピード、軌道、そして威力は大体把握済みだ。途中でツインダガーを用いて落とせる弾は落としていく。

「意外と、やりますわね」

射撃を取りやめ、ビット攻撃に移る。

「これなら……」

「だが無意味だ」

そのビット攻撃こそ、彼女最大の攻撃方にして最大の過ち。

普通ならその不規則な攻撃に悩まされるところだが、残念ながらビットでの攻撃中に棒立ちしている相手に俺が劣るのはありえない。

「マルチゲニッションブースト  
連続瞬時加速」

これを用いて、加速から攻撃を繰り返す。そうすることでビットを全てたたき落としてから……。

「終わりだ」

後ろから喉元に“ヴェーチェル”、そして背中に“リョートウ”を突き立ててそう呟く。

「降参するか？」

「……私の、負けですわ」

こうして、対候補生戦績は幸先がいいことに勝ち星となった。

## 第一話 翠玉の閃光（後書き）

どうも、@miaです。

いかがだったでしょうか。

面白いと思った人も、面白くないと思った人も、ここまで読んでもらってありがとうございます。

タグに関しては、今だとネタバレになってしまうのでまだ控えめです。

その内色々と開放されていくので、これからもよろしく願います。

## 第二話 銀髪の少女

模擬戦を終え、ピットへと降り立つとドイツ代表候補生のラウラ・ボーデヴィツヒがいた。

「貴様がヴァデームか」

「ああ、そうだが」

冷淡な声や左眼にした眼帯が彼女がいかに強いかを語っているような、そんな気がした。

「今の戦い方だが……中々に面白い」

「そりゃどうも」

「だが、機動力に頼る戦い方では私のシュヴァルツェア・レーゲンは倒せないぞ」

確かに、あのAICはかなりの強さを誇る。だがしかし、それにだって弱点がないわけではない。

「ああ、そこが問題なんだよな……」

ここはとりあえず、対策なしという対応をしておいた方が後々で戦った時に有利っぽいので、そうしておくかな。

「楽しみにしてるぞ」



颯爽とばかりに立ち去っていく彼女の後ろ姿を見つめながら、俺はしばらくその場を動けずにいた。

「……って、今は授業中じゃん」

胸によくわからない蟠りを残しながら、俺はアリーナへと向かった。

## 第二話

「銀髪の少女」

「ヴァン、お前こんなに速く動けるのか」

「まだ速く動けるけどな」

ちなみに、今回の戦闘に関して彼女は不服なようだった。まあ、それもそのはずだろう。イギリスの代表候補生たる者が僅か5分もかからない内に負けるなんて、誰が予想出来たか……まあ俺は勝つことしか頭に無かったがな。

「ヴァディムさん、今回は負けましたが次は負けませんわよ」

と言に残して、彼女は去っていった。……いかにも負け犬っぽい台詞だと思ったが、彼女のプライドのためにも少しばかり黙っておこうじゃないか。

それから時間は流れ、昼休憩に。

「学年別トーナメントねえ……」

「ん、まだ考えてたんだ」

昼食であるカレーライスを食べながら、俺はシャルルの言う通り  
思案中だった。

今日の実習が終わってからすぐに生徒に通達され、この昼休憩で  
はこの話題で持ち切りだった。というよりは、持ち切らざるを得  
ないと言った方が正しいのか。

「しかも、二人組ときた」

つまり、誰かとペアを組まなくてはならないそうなのだ。この学  
園で友人が極端に少ない（まだ転校初日だったのに色々ありすぎだ  
ろおい）俺にとってはかなり痛い話である。

「そういえば、ヴァンは誰と組むんだろうか」

「さあ、僕は一夏と組むからなあ」

一夏はシャルルと組むらしいし、これは困ったな。今のところは、  
この二人しか友人がいらないから……。リア充爆発しろって、今使  
って良いんだっけ？

そんなことを考えながら、食事をしていると。

「ねえねえ、日崎君はもう決まってるのかな」

「もしいなかったら、私と組んでくれないかな？」

「あ、抜け駆けはするいよ」

「いや、ちよつと皆落ち着こうぜ」

食堂にいた数人の女子に押しかけられて困っていたところ、そこに颯爽とある少女が現れて。

「私に決まっているだろう」

周囲のざわめきが一瞬にして止む、正にこれこそ嵐の前の静けさ。とでも言えば良いのか、それをいいことにラウラは俺の方に近寄ってきた。

「異論は？」

「ない、というかこっちから願い出たいとこだな」

学年第一位の実力を誇るのはきつと彼女だろうし、その彼女から声がかかると言うことは俺の実力が少なからず認められているということに繋がる。

それに、俺自身が間近で彼女の戦い方を見てみたかったつてもある。

「それなら問題ないな」

その会話を聞いて、さっきまで群がっていた女子郡は散らばってしまった。

少し待ってもラウラがもう何も言いなさそうだったので、再び昼食であるカレーライスに手を伸ばす。

「いやいやいや、ちょっと待ってよ二人とも」

「そんなに簡単にタッグ組んでもいいのかよ」

「簡単も何も……な」

「そうだな、ヴァディムの言う通りだ」

「「自分が一番強いと思う奴と組む」」

お、見事にハモったな。てか、俺ってラウラからそう思われてたんだ。嬉しいじゃないか。

「……この二人ならなんだか良いような気がする」

「一夏、同感だよ」

そして二人も昼食を再開する。

「あ、そうだ。ラウラ、放課後特訓用にアリーナの申請を……」

「既に終わっている、一七三 から第四アリーナだ」

「了解」

最初から俺を誘うつもりでここにきたようだったので、手間が省けたらしい。ちなみに、俺としても手間が省けたので良かった。

「ではな」

既に昼食は済ませていた様で、ラウラはくるりと踵を返して教室へと戻っていった。

その後ろ姿にまた見とれていることにまた気がついて、あわせてカレーを食べに戻る。

「ヴァディム君って……」

「ん、なんだ」

「もしかしくなくても、ラウラに惚れたでしょ」

「ん……、そうかもな」

確かにラウラに好意を寄せていることは認める、でも単純にそれだけじゃない気がするんだが……。

「あまり否定しないんだね」

「まあ、彼女に会うのもここに来た一つの理由としてある。……勘違いしないでほしいが、これは専用機持ちの面々を見たかったと言う意味に過ぎないからな」

言い訳ともとれる言葉を濁しておきながら、またカレーに手を伸ばす。

「なるほど、なら後で白式とも模擬戦するか」

「僕のR・リヴァイヴ・カスタム？ともしてほしいな」

「なんなら、二人まとめてでもいいぜ。どうせ二人組のトーナメントなんだし」

「言ったね、後で後悔しても知らないよ」

「ここまで言われては引き下がれねえな」

「あ、やっぱ明日以降でもいいか？」

今日はラウラとの訓練に専念したい、というのもあるが単純に模擬戦を一日に何回もするもんじゃない。

とりあえず、そうやって濁しておきながら今日の昼を終える。

その日の放課後、指定された時間の10分前にアリーナに着くともうラウラはそこにいた。

「早いな」

「……ふん、お前が遅いだけだ」

「まあ、今日からよろしくお願いしますよ。教官」

「……私はそんなに大それた人間ではない」

瞬時に織斑先生を思い比べたのか、ラウラは少し肩を落とすような雰囲気だった。……こりゃ口が滑ったというレベルで済みそうで

はないな。

「スマン、ちょっとした冗談のつもりだったんだが」

「気にするな。いずれ私もそうなる身だ」

ラウラが教官か……。

それをイメージして、すぐにピンと来ることから多分ラウラにはその気質があるんだと思うし、そのための実力はまだまだ向上していくだろう。

「んじゃ、改めてよろしくな。ラウラ」

「ああ、こちらこそ頼む」

握手を交わして、俺達のペアはここからスタートした。

「それじゃあ、まずはどうしようか」

「うむ、まずはお互いの機体のデータが必要だな」

そういつて、ISを部分展開させるラウラ。それに習って俺も部分展開する。

本来なら、全展開の方がいいがそうすると俺の目線が合わないの  
でそうしてもらった。

「それにしても、このAICってやっぱ脅威だな」

アクティブ・イナーシャル・キャンセラーのそれぞれの頭文字を取ったその能力は、感性停止能力でありロックした相手の動きを止めることが出来る。

ラウラ自身は、この能力のことを停止結界とかなんとか言っていたが、ズバリのを得た表現である。

かなり高性能な感じだが、弱点がないわけではない……。今はまだ見つけられないが。

「機動力ではお前の方が上だ。だが、これでは遠距離戦闘はほぼ苦しいな」

「基本的にはこの近接戦闘が、イズムルートの持ち味なんだがな」

「あらゆる場面を想定して、戦い方を考慮しないとダメだぞ」

「なるほど、だからラウラのISは万能型なんだな」

「当たり前だ」

「とりあえず、作戦と言っても一対一に持ち込む戦い方が一番手っ取り早いと思う」

「それができれば問題はないが、敵も基本は連携をとってくるだろう」

「なら、こつちも連携とってみるか？」

「そうだな……お前のその機動力を私の攻撃力に転化、あるいは私



の停止結界をお前の攻撃力に転化する」

「具体的には？」

「前者はお前が私を武器ごとの適性位置まで高速で運び、そこからの攻撃を打ち込む訳だ。後者は私が停止結界を用いて敵を止めている間に、お前が攻撃を打ち込む」

どちらにしる口にしてしまえば単純なんだが。

「前者の場合は、俺とラウラのタイムラグが発生する可能性。後者に至っては、俺がA I Cに巻き込まれないかが心配だ」

「前者は地点に達したら勝手に降りる。私がその程度のタイムラグを測定出来ないとしても？」

「後者の場合は？」

「お前が攻撃するときだけ、停止結界を一時的に解く。なるべく相手が動く暇なき連続攻撃を与えてほしい」

「了解、わかりやすい説明だった」

こうして、俺とラウラは簡単な作戦会議を終えて特訓に入ることにした。

## 第二話 銀髪の少女（後書き）

予定より早めに第二話を投下してみましたかどうか？

今回はちよつと内容を濃くしてみたつもりでしたが、はたして伝わったでしょうか……。

さてさて、とりあえずは次の話の予告的な感じになると思っています。

今回の前半部分は大体この特訓とかについてなんです、後半からこの作品のタイトルでもあった伏字の部分について書こうと思案中です。

このまま伏字のままにしておいても良かったのですが、やっぱり隠したままと言うのは居心地が悪いので。

なぜ、【イズムルート】が彼を選んだのか。  
気づいている人があまりいないことを祈りつつ。（面白みが半減してしまいそうですので主に私の）

それでは、また週末（予定）にでも。

### 第三話 誕生石のコア

「とりあえず、軽く準備運動がてらに軽くやるか」

「ん、そうだな。ラウラのAICのタイミングとかも知りたいし」

模擬戦、というよりは武術などに使われる約束組手に近い戦闘。俺のISに合わせて、近接限定の組手は妙に楽しくもあった。だが忘れてはいけない、これが人殺しの兵器になりうることを……。

「どうかしたか、ヴァデーム」

「ん、少し考え事をな」

約束組手とはいえ、戦闘中に余計な考えを持つとは我ながら情けない。

今は集中して、ラウラに向き合わないと彼女に失礼だ。過去なんて振り返っている場合ではない、振り返る必要もない。

### 第三話

#### ～誕生石のコア～

ラウラと特訓を始めて早三十分も経っている、大体俺の速度を攻撃転換するのは把握出来たようで（戦闘においてのラウラの適応能力は半端ではない）次はラウラが一度AICを用いて敵の動きを止めて、そこに攻撃を打ち込む方の練習なのだが。

「また失敗……か」

「済まない、ラウラ。タイミングがどうも掴めなくて」

特訓方法は至ってシンプル極まりないので、ラウラが空中に放り投げた空のマガジンをAICで停止させ、それに向かって俺は加速。その後、タイミングを合わせてラウラがAICを切断することで、俺はAICの効果を受けないまま攻撃を加えることが出来る。

……と言っわけなんだが、いかんせん上手くいかない。

まず、瞬時加速が使えないのは痛かった。自分の身を案じるためでもあるが、スピードがイマイチ乗らないのでタイミングがズレる。

「まさか、初速度の向上のために加速する時に一度瞬時加速しているとは」

「といっても、三メートルあれば十分なんだが……」

今回はその課題もついでに乗り越えよう、というラウラの提案で瞬時加速は使わないことになっている。

そして、二つ目はなにより目標が小さいんだよこれが。

空のマガジンつつても、IS用ではなく通常武器の方を用いている（理由は学園内にいらないのが多数あったからだそうだ、いつ調達したかはあえて聞かないでおいたが）ので、当てづらい。

「こっ、居合とか使えないのか？」

「……それだ！」

「ん？」

全く懸念してなかった。

そうだよ、居合を使えば良いんだ。基本的にツインダガーばかり使ってるから、日本刀の装備のことを忘れていたよ。

てか、イズムルートの初期搭載武器だった……。

「日本人である父さんに感謝しないとな」

ツインダガーを一度戻して、日本刀“翡翠”を展開させる。

「ふうむ、良く出来ているじゃないか」

日にさらしてその輝きを見ていても、心が洗われるような感覚……。

このままでは居合は不可能なので、鞘も展開しておく。というかまあ居合なんてやったことがないからうまくいくかどうかなんてわからないが、とりあえずやってみよう。

「いいぞ、ラウラ」

さっきまでの一連の流れで空のマガジンが放り投げられ、それが途中で止まる。その止まった瞬間を見計らって、踏み込む。

一歩目は半歩程度に留めて、体制を整える。前傾姿勢にしつつ二歩目は大きく踏み出して、そこからスラスターを用いて加速する。

居合の極意はよく分からないが、とりあえずイメージだけを浮かべる。目標を定め、刀に手をかけ、一気に引き抜く。

先ほどはなかった手応え、確かにマガジンに攻撃を当てる事が出来たのだが。

「まだまだこれでは使い物にならない」

マガジンは不揃いな形で割れていた。中心（多少の誤差はあれども）を捕らえて斬らないと、ラウラの合格ではないみたいだ。

「でも、これで感覚は掴めたはず。もう一度頼む」

今日の特訓時間ギリギリまでこれが続けたが、成果は少なく合格を貰える所か今だに攻撃が当たる確率も三回に一回程度だった。

一日で身につく技術でないことは覚悟していたが、こうも上手くいかないのは少し気が滅入ってしまうが、新しいことに挑戦する時は大体こうだ。

と、自分自身に言い聞かせて今日のところは解散することになった。んで着替えをちゃちゃっと済ませ、寮に戻る途中……。

俺はとあることに気がついた。

「俺の部屋ってどこだよ」

大体放課後までに教えてほしいものなのだが、まあとりあえず夕食時なのでそれを食べてから山田先生でも織斑先生でも探すとしよう。

一夏とシャルルはもう夕食に向かったらしく、どこにもいない。ラウラはラウラで何か用事があるって言ってたので、現在は一人淋しく夕食に向かわなければならない状況下に置かれている。

「おい、日崎」

後ろから声がしたので振り返ってみれば、織斑先生がそこにいた。

「何でしょうか」

「ちょっとこい、大事な話だ」

こっちとしても、部屋割のことについて色々と聞きたかったから丁度良かった。

織斑先生に肯定の意思を伝えると、何も言わずに歩いていくので慌ててついていく。

歩いて5分くらいだろうか、俺は自分のクラスにいた。当然、そろそろ夕食の時間なので誰も教室にいるわけがなく俺は織斑先生と一対一で対話する形になった。

「それで、用件はなんですか」

「なに、簡単なことだ……」

コンマ何秒かの間に、俺は織斑先生に後ろ手を取られていた。

「そのIS……BSISか、それをどこで手に入れた」

「ちよつ、先生。離して下さいよ」

「それは無理だ。そんなことより、私の質問に答えろ」

「答えるも何も、貴女は知ってるはずですよ」

BSIS、その単語の意味を先生が知っているのならばこの質問は無意味だ。

「東博士にしかISのコアは作れない……これが答えです」

「何を言うかと思えば、そんな洞を吹くか」

「賢い貴女なら分かるはずですよ、博士の性格上……ね」

「生憎、私は分からないな」

「妹思いな博士なら、と言った方がいいでしょうか」

「……」

「貴女が気づいていないはずがない、俺がBSISに乗っていることが意味することを、もう針は動き出していることを……」

「黙れ……」



その声はとても低く、女性だとは思えない程の威圧感。それをつだけの理由が、この件にはあった。

B S I S……、正式名称は【バース・ストーン・インフィニット・ストラトス】といい、誕生石のコアを用いて作られた十二機のI Sのことを指す。

東博士が一番最後に作ったコアで、I Sのスペックを最大限に引き出すことができるコア。それが誕生石のコア。

だがしかし、そのコアで作られたI Sには自己意識が生まれるらしく、操縦者を“I Sが選ぶ”形になる。

つまりとところ、最大限引き出したI Sのスペックを最大増幅できる人材が選ばれる。そこに善悪の意識は関係ないので、誕生石のコアに選ばれた人間は正に神に近い人間ともいえる。

さらに、B S I Sは東博士による支配下から逃れるのでそれに乗って好き勝手に行動することが可能になる。

今は力をセーブしている（というよりはまだ試作段階で全力を出せないだけだが）イズムルートも、膨大な能力を秘めている。

「分かってます、これを扱うことが何を意味するかなんて」

いずれ戦争に巻き込まれる可能性だって少なくはない。今は条約が結ばれているから良いものの、この条約が意味を成さなくなった時点で俺はロシア軍に所属されるだろう。

いくらI S学園が無国籍学園だからといっても、条約が破棄され

た時点できつとこの学園も壊滅される。多分、ではなくて絶対に。

「……分かってなんかいない、ISを用いた戦争なんてものがどれ程までに残酷かが」

「確かにBSISは戦争の起爆機になりえます。しかし、抑止力にもなりますよ」

かつて各国がこぞって核兵器を保持していたのと同じ様に、人は起爆材になりうる抑止力を求めている。

「それに、イズムルートが俺を選んだ」

別に乗ることを義務づけられてる訳じゃないけれども、俺にはやらなきゃいけないことがある。

「俺はイズムルートと共に歩むことを決めた、そして姉さんを倒さなければならぬ。……貴女がISを用いた戦争に関して否定的なのは知っている、博士がよく言っていたから」

「……」

「博士だつて、今自分が作った機体の制御が出来ないことが辛いはずだ。だけれども、そこで手を休める訳にはいかない」

博士がしてくれたことに対する感謝の念も込めて、俺はこのイズムルートと共にある。ISで変わった自分の運命を受け入れ、そしてISで終止符を打つためにも、イズムルートは必要だから。

「そして、一夏が使っているIS“白式”……これはBSISとは

また別だけれども、起爆材でもある抑止力の一つ」

簡単に言えば、対BSIS用ISとでも言えるだろう。対BSISどころか、全ISに対しての抑止力にもなりうる程にあのISの力は大きい。

「貴女が知らないはずがない」

と、もう一度だけ言ってから後ろ手に捕まっていた体制を一瞬で解く。

「っ……」

「今の貴女なら、あの一夏でも勝てますよ」

それ程に彼女はISを、そしてたった一人弟を大切に想っている。束博士のことだって多少は心配しているはずだ。

それに、彼女はもうISからは離れられない。

「もう一つ、多分知らないでしょうから言うておきますけど。束博士の妹さんが七月のコアから選ばれました」

それを聞いて、さらに瞳孔を開いてこっちを見てくるが、彼女に選択の余地はないし、尚且つ立ち止まることすらもう許されない。

過去の栄光だけでは、この先は意味がない。

### 第三話 誕生石のコア（後書き）

いかがだったでしょうか。

自分としては説明口調で今回は進めていたんですが、少々重苦しかったかもしれませんね。まあ、意図的にそうしたわけですが。

そして千冬姉ファンの方々には謝っておきます。  
なんか全然らしくないかんじにしてしまいました。

まあ、色々と原作ブレイクしていくと思いますがなるべく温かい目で見てもらえると嬉しいです。

#### 第四話　　＼ISという力＼

イズムルート・フスプイシカ……。

表面上では500もないISの一つ、そしてそれらのISより高いスペックを持ちながらもまだまだ成長の幅が半端じゃないくらいあるという。

イズムルートは速さを欲している、それがなぜなのかは分からない。でもイズムルートは他のタイプは受け入れなかったらしい、そして俺以外を選ばない。

なあ、イズムルート。

お前は何故俺を選んだ……いや、多分選ばれる運命だったとしか言いようがないのかもしれない。

#### 第四話

＼ISという力＼

そろそろ夕食時というところ、俺はさっきの曇った気持ちを晴らすと、俺は食堂に向かった。

「あ、日崎君。丁度いいところに」

「山田先生」

「こちらに部屋割の紙があります、それに従って自分の部屋に行ってください」

渡された紙を見ると、どうやら二人部屋を一人で使ってオツケらしい。事前に荷物は送っていたので、整理は結構楽だと思う。

「荷物運ぶの大変だったそうですよ」

「うつ……すみません」

「まあ、IS使いましたけどね」

いや、そんなに重くないはずだし……。てかそんなことでISを使うなよ、おい。

「とりあえず、夕食食べてから荷物の整理します」

「よろしく願いますよ」

山田先生と別れて、食堂に向かう。今日の夕食は何カレーにしようか迷っていると、後ろから声をかけられた。

「よお、ヴァン。今から夕飯か？」

シャルルと訓練を終えた後そのまま来たんだろう、二人で来ていた。

「そうだ、今晚は何カレーを食べようかと思ってな」

「昼もカレーじゃなかったっけ？」

「そうだが、何か問題でも？」

昼と夜じゃ食べる種類が違うから、俺的にはノーカンだ。朝は毎朝日本人的朝食を食べてるし……。別に問題ないだろ？

「いや、問題というか……な」

「うん……ね」

「二人して何をアイコンタクトとってるんだよ。まあ、二人も一緒に食べようぜ」

食券を買って（ちなみにグリーンカレーにした）おばちゃんから商品を受け取り、空いている席を探す。

「うーん、中々見つからないな」

「ちょっと待ってて……よし」

シャルルが何かを決意したように、とある席に向かっていきそこで数回の対話を交わした後でこっちにこい、的なアピールをしてきたので一夏と共にそっちに向かうと数人の女子と相席することになった。

「うわあ、織斑君とデユノア君と夕食なんて夢みたい」

「ごめんね、急に頼み込んで」

「い、いやいやいや。こんな幸福なんてないですよ」

「ありがとな」

なんか、俺疎外感？

「えっと……もしかして俺って邪魔？」

「ううん、別に」

とりあえずは良かった……。

「あまり気にかけてないから」

前言撤回。

やっぱり俺って邪魔じゃん、この転校初日の疎外感がいつまで続くかな……。うん、頑張ろう俺。

その後も、色々と疎外感を感じながら夕食を黙々と食べて、とつとと去ることにした。

一夏やシャルルが制止するが、部屋の片付けも残ってるのでという理由で先に帰った。

早足で自分の部屋に向かったので思ったよりかは着くのが早かった。とりあえず部屋割の紙と同時にもらった鍵を用いて、部屋のドアを開ける。

部屋の中に入って、電灯を点けてから辺りを見渡す。



ISを使う程に大きな荷物は持ってきたつもりは無かったので、少し違和感があった。

部屋のと真ん中に鎮座されている、馬鹿デカイ段ボール箱……。

隣に置いてある自分が持ってきた段ボール（引越しの時に用いるくらいの大きさ一つ）の数倍はある。てか、絶対一人入るよこれ……。

「もしかして、束博士ですか？」

「んや、当てられちゃったねえ。じゃあ用件を……」

「イズムルートは渡さない」

「ありや、わかった？」

「当たり前でしょ、貴女のポリシーは俺だって知ってる」

彼女は完璧にして十全な篠ノ之東である、すなわち作るものも完璧において十全でなければ意味がない……。

彼女にとってこのBSISは欠陥品である、だが俺にとつちや唯一なもんでね。

「貴女が完全なる完璧を心情にしているのは知っています、しかし……」

……

「ちよつちタイム、君は何か勘違いしてるよ」

「え？」

「これこれ、じゃーん」

彼女は段ボールの中から飛びでて、さっきまで自分が踏み台にしていた箱を取り出そうとする……が。

「ふにに……、お、重い」

「いや、手伝いますよ」

イズムルートを部分展開させて、段ボール内から器用にブツを取り出す。

「これ、なんか異様に重いんですけど……」

「まあ、全部マトリョーシカ的な感じの多重ロックなんだけどね」

彼女がそこまでしなければならぬ理由があるものが、この中にはある。と、少し考えている間にも既に解除が終わっていた。

「さあさあ、中身をご覧ください」

中には二つの拳銃、そしてチップが一枚入っていた。

「これは……？」

「見ての通り二丁拳銃<sup>ツインバレット</sup>、その名は“<sup>スィー・エル・イー・ブリーヤ</sup>灰色の嵐”」

名は体を表す、とはよく言われるがこの二丁拳銃は正に灰色だっ

た。IS用、というかイズムルート用で少しサイズが大きいし重い。

「君のには遠距離系武器が無かったから、特別サービス……と言いたいところだけど」

「今回の目的は別、ですか」

「そうだねえ、本来の目的はこっち」

そういつて、チップを取り出して微笑む彼女。

多分、イズムルートに関わる何か。……まあ、どんなときでも俺には選択肢がないわけだが。

「……仕方ないですね、はい」

右腕を展開して、彼女に差し出す。待つてましたとばかりに何本かの線が繋がって、操作が始まるが……すぐに終わる。

「終わったよん」

「一体何をしたんです？」

「拡張領域パススロットの拡大とそして、この子イズムルートが形態移行フオームチェンジするために必要な素材を、ね」

詳しい説明によると、拡大した拡張領域に灰色の嵐を追加してその残りの領域に形態移行した時に武器が生成できるようにデータを改ざんしたらしい。

データ上では、灰色の嵐が領域のほとんどを占めていることになるが実際はイズムルートが更に強化されていくため……。いや、もっと完全にして完璧なISを完成させるために。

それが彼女の欲望であって、俺が姉さんを倒すためには必要な力。

「イズムルート、調子はどうだ？」

もちろん答えてくれるわけがないし、俺だって答えを期待したわけじゃない。何というか、もう癖になった感じである。

「ちなみに、灰色の嵐はわざわざ部分展開せずとも携帯できるよ。重さ《ウエイト》の調整は自分でしてくれなきゃ」

「いや、別に俺はこんな物騒な物を携帯する気はないで……」

「これからの時代がどういうものかわかってるかな？」

……。

言葉も出なかった。

その言葉には、別の意味がこめられているような気がしてならなくて。

俺は、ずしりとくるとても重い拳銃を手に取る。

この重さと天秤にかける人の重さは、計り知れないものと知りながら。

#### 第四話　　ゝISという力ゝ（後書き）

いえゝい、第四話目だゝ。

前回よりまた重い話になってしまいました。

えっと、まあでもこれが@m i a仕様ってことで勘弁してください。

こんな感じでどんどん突き進んでいきますが、どうぞよろしく願  
いします。

## 第五話 忘却の彼方

IS学園の地下にある射撃訓練所に俺はいた。勿論、さっき受けとった拳銃の試し撃ちをしにきた。

博士は用件が済んだ瞬間にどこかへ脱兎のごとく逃走していったので、詳しいことはあまり聞けなかった。尤も、まだ博士にも策略を気づかれてはいないだろう……。

いや、あの人のことだ。気がつかないふりをしているという可能性もないわけではないだろうし、俺にこれを渡したということはそう遠くない未来で……。

「今はやめとこうか」

あんまりふさぎ込んだ考えばかりでは、気分も悪くなる。常に最悪の事態を頭にいれておくことは重要だが、それでネガティブになるのは本末転倒だ。

とりあえずは、拳銃の使い方だが……。

「拳銃なんて、久しぶりにもつな」

あの時は、自分がまさかISを扱えるなんて思ってもいなかったし、護身用くらいのレベルでしか拳銃は使えないはずなんだが。

まずは一つ手にとり、十数メートル先の的に標準を定めて何発か撃ってみる。

確かに、反動は凄いが無視できるレベル。知らぬ間に筋力でもつけたのかもしれないが、今はとりあえず無心で撃ちたかった。

両手で支えて一マガジン（八発）を撃ちきったところでリロード、そして今度は右手で片手撃ち。さっきより狙いは少しずれるが、それでもなんとか撃てる。

また一マガジン撃ちきってからリロードして、今度は左に。それが終わったら二丁の拳銃を左右に持ち、交互に撃つ。

相変わらず反動は来るが、それよりも一心不乱に撃ちまくる。

途中で、重さの調節に使われていた鉛を調節しながら自分にあつた武器にしていく。

用意したマガジンを全て使い切ったところには、もう既に感覚を取り戻したところか、以前より俄然撃ち易くなっている自分がいた。

「この感覚、か……」

忘れていた感覚、というよりは抜けていた感覚と言った方が正しいだろうか。それほどの違和感を胸に、俺は自室へと戻った。

## 第五話

～忘却の彼方～

あくる日、俺が朝食（朝定食セット＋ミニカレー）を食べていると、ラウラが近寄ってきて。

「今日も昨日と同刻同場所にこい」

「了解。ラウラはもう朝食べたのか？」

「今からだ」

「じゃあ、待ってるからこっち来いよ」

「分かった」

ラウラが朝食（パンとコーンスープにチキンサラダ）を持ってきたのを確認して、食べるのを再開する。

「そういえば……お前、私と以前にあったことはなかったか？」

「は？」

俺の記憶上ではラウラとあったことなんかないし、勿論ドイツにもいったことがない。

「いや、多分人違いだろう」

「自己完結できたなら何よりさ」

ぼそっと、ラウラはこう言った。

「……あいつの瞳は紅かったからな」

「何か言ったか？」



あえて聞こえてないふりをしたが、聞こえないはずがなかった。  
だが、紅色か……。

ラウラは色々と勘が鋭いことがある、多分昔の俺も少しながら覚えていたはずだ。だが、まだ今思い出してもらうわけにはいかない。

「そういえば、朝からしつかりと食べるんだな」

どうやって話をすり替えようか迷っていると、ラウラから話を变えてきた。

「ん？ まあ今日はちよつと腹が減ってたからな」

昨日の晩の射撃練習が結構きてるみたいで、いつもより少し多めの朝食だった。

「朝にエネルギーを十分補給しておくのはいいことだ」

逆に夜沢山食べるのはあまりよくないらしい、というのもちやんと理由があつて。なんでも、あまり身体の活動がない夜に沢山食べてもそれは全部脂肪分に回ってしまうかららしい、脂肪がつくと身体のカレに問題が発生して自分の力を十分に発揮できないそうだ。

脂肪分ってのは、いわば身体の中にある重りみたいなものであるからその理論は正しいと言える。

「常識だ」

と、少し誇らしげにパンをかじるラウラ。

「そうかい」

「ふん……」

それからは俺もラウラも朝食を黙々ととった。

時は流れて授業に。

「今日の実習は武器の特性についてだ。デュノア」

「はい」

「今からターゲットを出す、それをアサルトライフルを用いて撃ち抜け」

ルールは至極単純で、呼び出されたターゲット（今回は500枚）を三分間でどれだけ破壊することができるか、というものでターゲット一枚一枚に得点が違うので高い得点のものを優先的に破壊することが優先される。

「分かりました」

話を聞いてすぐにISを展開し、すぐにアサルトライフルを構える。

シャルル・デュノア……。世界でISが使える男子、ではなく実は女子でその実態には別段興味ない。

使用ISはR・リヴァイヴ・カスタム？。以前から汎用性に優れ

ていたラファールの拡張領域バススロットを増やして、様々な武器を色々と入れているので様々な戦局に対応できるらしい。

実際問題、逆にやるが多すぎて俺には向かない戦い方である。

「終わりました」

俺が色々と考えている間に、既にターゲットは全て撃ち抜かれていた。

スコアは10352点、量産機の平均が大体5000台、代表候補生の平均は大体8000台なのでかなり高いと言える。

「ふむ、まあいいじゃないか。セシリア、日崎お前達もだ」

「了解ですわ」

「分かりました」

イズムルートを展開、そして二丁拳銃を構える。

「全部含めて約一秒……もう少し早く展開しろ」

それでも早い方だと思うんだがな、二丁拳銃は昨日きたばかりなんだし。

「オルコット、銃口をどこに向けている」

「これはイメージしやすいように……」

「言い訳は無用だ、直せ」

さすがのセシリアもこの気迫には勝てないようで、しゅんとしながらも素直に従うようだった。

「お前達にも同様のことをしてもらう、まずはオルコットからだ」

自慢でもある射撃の腕の見せ所なので、セシリアは張り切っていた。

「フランスの第二世代には負けませんことよ」

「昨日の試合をみたところ、射撃に関しては僕の方が上だと思うな」

俺としては後がつつかえてるので早くしてほしい、それがお互いのためだ……。

「いつまで待たせる気だ」

織斑先生の制裁が下ったため、英仏の睨み合いは終わったがセシリアの方はまだ勝つ気でいるみたいだ。

「では……いきます」

セシリアは六つのビットを操作して、ターゲットを破壊していく。

「てか、ビット操作なんてよく出来るよな」

「一夏、あれ多分セミオートだ」

ビットの動きをよく見ると、停止と放射のタイミングが少し違う。移動はマニュアルだが、攻撃は秒単位のオートだろう。

まあ、そうだとしても六つのビットをしかも射撃間隔を考慮した上で動かすとは……。代表候補生の名は伊達じゃなかったと言うところか。

「終わりましたわ」

スコアは9875点、平均は軽く越えたもののシャルルには程遠い。

「ほらね、やっぱり僕の勝ちだ」

「だが、まだ俺が残ってるぜ」

そう言って、拳銃とツインダガーを取り出す。

「俺は少し武術を嗜んでいてな、その延長線上として軍の訓練も受けてたんだ」

「一体なにを言ってますの？」

「まあ、見てなっつて」

動かない無機質的な相手に、時間はとらない。

「全ては、一瞬だ」

アジン ドゥヴァー トゥー  
一つ、二つ、三つ……。

心の中で呟いて、力を覚醒させる。力の流れが変わったことが分かる、自分の身体が自分のものじゃないみたいだな、そんな感覚……。

「では……、始め！」

開始と同日に、ツインダガーの出力を最大にして自分は超速回転を行う。更にツインダガーを脇に挟んで二丁拳銃でこぼれたターゲットを狙い撃つ。

その間、僅か三秒……。

「終わりました」

力の流れをまた元に戻して、気分を整える。

「嘘……でしょ？」

「私達の二倍以上の得点を、あんな一瞬で……」

代表候補生どころか、この場に居合わせたほぼ全ての人間を震撼させてしまっていた。ちょっと本気を出しすぎてしまったようだった。

カラーコンタクトがずれていないかを確認してから、イズムルーを収納する。

「すげえよ、ヴァン。こんなこともできるのかよ」

「まあな、母さんの形見で不甲斐ないところは見せるわけにはいか

ないだろ」

……だとしても、反応が良すぎる。ハイパーセンサーも感度が抜群、回転に用いたエネルギーとツインダガーに用いたエネルギーの総和も以前より減っている。

昨日はそんなことがなかったので、やはり東博士が拡張領域やその他うんぬんかんぬん言っていた時『ついで』に色々と弄ったんだろ  
う。

多分、他の機能も以前より強化されているに違いないだろう。あの人がしそうなことだし、俺としては願ったり叶ったりだ。

「こりゃ、ヴァンとは戦わない方がよさそうだな」

「……戦場に行けば嫌でも戦わなきゃいけない時がくる」

「え？」

「いや、なんでもない」

さっき一夏に言ったことを、自分に言い聞かせるべく復唱しながら、俺はいつかくるはずの戦争に嫌悪感を感じていた……。

## 第五話 忘却の彼方（後書き）

いかがだったでしょうか。

今回は複線だらけの話とってもらってもいいくらい、色々残しました。

これからまた回収をどうやっていくのか、まだまだ考慮中なんですけどね。



## 第六話 音速の先にあるもの

全ては、一瞬だ。

なんてことはない、時間はいつだって細やかな点の連続……。ゲームとかであるセーブポイントとかの概念となんら変わりはないと思うが、当然ながら実際に時間は遡れない。

だからこそ、一瞬なのだ。

俺が俺であるために一番必要な感覚とも言えるそれは、俺が抱えていた重みをさらに思い知らすこととなる。

おかえり。

忘れていた感覚……いや、一度完全に失った感覚。失うことを望んだ感覚。

ただいま。

忘れていた記憶、忘れようとしていた記憶、思い出したくない記憶……その全て。

今も昔も、あの日あの時あの場所で変わらざるをえなかった俺の人生。いや、結局のところはそれがなかったとしてもこの先にある運命は避けられるはずがない。ただ、俺が関わるかどうかの相違点しかない……それだけだ。

## 第六話

「音速の先にあるもの」

少し集中出来てなかった授業も、その後のHRも終わって放課後。現在はラウラと訓練するべく、アリーナに向かっている。

「おっ、ヴァムーだ」

「えっと……あ、のほほんさん」

一夏がそう言っていたのを思い出し、口にする。

「ん、おりむーと同じ呼び方なんだね。まあいいけれど」

「何か用件があるのか？」

「えっと、生徒会長さんから文を預かってまいりました」

と、袖で隠れていた手から封筒を渡される。……どこから出てくるんだよ、おい。

色々ツツコミ所は満載だったが、こういうのはあまり気にしないに限る。それに、封筒の中身も気になるし。

そして封筒を開けると、中には一通の手紙が。……ああ、文って手紙のことを指してたのか。こういう風に、たまにわからない日本語があるから困る。

とりあえずは、手紙を読んでもらうことにしよう。

『夕食前 に来て』

……どこに行けばいいんだよ、おい。

気がつけばのほんさんはいないし、さらに俺は彼女の連絡先も知らない。

「……困った」

とりあえずヒントがないかどうか、封筒の中を調べてみるが何もない。手紙の裏にもないもないし、シャーペンなどで傷つけた様子もない……が、一つだけ分かった。

仄かな柑橘系の匂い、するところつまりあぶり出しだろう。戦場においてもたまに使われる文通手段としてあり、運のいいことにあぶり出しを上手にするコツも習ってたりする。

が、やっぱり一つ疑念が晴れない。

秘匿情報としてあぶり出しを選んだのは容易に想像ができるが、わざわざ秘匿情報にする必要がある？

「お、ヴァンじゃないか」

思案していて突然後ろから声をかけられたもんで、我ながらビツクリしたが平然を装って一夏のほうに向く。勿論、封筒は既に征服の内ポケットの中に収めていて抜かりはない。

「今から特訓か」

「ああ、やっぱりパートナーであるシャルルに迷惑はかけられないしな」

一日二日ですぐにかなるほど、ISは甘くないがそれでも一緒にいる時間が長ければ長い程、ISは応えてくれる。

「精々俺達とあたるまで負けないようにな、とだけ言っておこう」

「なんでそんなに自信があるんだよ」

「そりゃ、パートナーがラウラだから……」

って、なんで俺はこんなにラウラを信頼しているんだ？

それに、久しぶりに開放したあの力……。もしかしたら俺は思い出しすぎてるのかもしれない、あの日のことを、あの戦争のことを……。

「どうしたんだ？」

「いや、なんでもない」

考えすぎだ。そう考えることにして、今は特訓に向けてしっかりしとかないとラウラに申し訳ない。あろうことか信頼されてるんだ、俺は。その信頼を裏切るという行為自体最悪なことだし、それをしないようにも日々頑張ってきてるんじゃないか。

「行くぞ、一夏」

「お、おう」

一夏と一緒にアリーナに行くと、既にラウラとシャルルがそこにいた。

「……何故ソイツがいる」

「いや、途中であっただけだ。それに今は戦場ではない、そう気を立てるな」

「そんなことを私がするわけがないだろうが、だが常に最悪の状況を予想しておくことは悪いことではない」

「今から気にかけてすぎだ」

「備えあれば憂いなし、という諺がこの日本にはあるんだろう？」

確かにそうだが。

「やっぱり、日崎君とボーデヴィツヒさんはお似合いだね」

なんてことを言ってくれる、シャルルよ。

「俺も思うよ、ヴァン」

一夏までっ？

「ふん、勝手に言っているがいい」

「どこに行くんだよ、ラウラ」

ぶいっと外を向きながら、頬を少し赤らめてスタスタと歩き始めたので慌てて後ろを追いかける。一応一夏とシャルルに別れを告げながら、だが。

「おい、何でそんなにはぶててるんだよ」

「別に……はぶててなどいない、ホラ、今から訓練するぞ」

先ほどのまでの雰囲気とは打って変わって、凜とした表情でISを展開するラウラ。この戦闘に向けるラウラの気合は凄まじいものだ、いやはや素晴らしい。

「じゃ、行くか」

イズムルートを展開して、レーゲンの前に立つ。

「今日は軽い戦闘だ」

まわりの生徒たちをあえて残すことで、障害物と考えるみたいだ。軍の訓練でもちよいちよいやってきたので問題はないし、それにこれからのトーナメントでも活かせることがあるだろう。いつも基本的には一対一か一対多、しかも自分以外に味方が完全にいない状態を考慮してイズムルートに乗ってたからな。

この間の瞬間回転攻撃も、完全なる一対多を見越して組み立てたものなので今回他味方がいる状態では無理だ。

「じゃあ、始めようか」

スィー・ルイー・フリーヤ

灰色の嵐を展開して、ラウラを迎撃しつつ距離をとる。ラウラのA I Cに対抗するべく、俺は常に移動している。

A I Cの弱点として、完全なロックオンができていないと意味がない。つまり動きを読み取られないようランダムに動く必要性があり、それをラウラに対して行うのは至難の業であるのは間違いないが、まだ距離がある分俺も何とかいけている。

そしてそれをするために集中力も必要だし、A I Cは多数の攻撃には不向きだ。

「そろそろ加速する」

マルチ・イグニッション・ブースト

連続瞬時加速を用いてランダムな直線運動で動きつつ、距離を詰めながらも射撃を続ける。リロードのタイミングを考えつつ威嚇射撃しているので、A I Cに阻まれることもない。

「よく考えたものだ、だが……」

動きを変えようとして、連続瞬時加速の切替を行おうとしている時にタイミングを合わされてワイヤーで左脚を絡みとられる。

「甘いぜラウラ」

俺は灰色の嵐を収納し、ツインダガーを展開する。その片方にエネルギーを集中させてその刃を伸ばしてラウラに向け、もう一つのほうはワイヤーを切るのに使う。

「甘いのは貴様だ」

伸ばしたエネルギー刃はA I Cによって阻まれ、さらにワイヤーを器用に動かしてツインダガーを落としつつ、イズムルートの全身を絡めとる。

ワイヤーに絡まれ、さらにA I Cにも動きを封じられる。だが、これも予想通り。

「残念だが終わりだ」

「試合はまだ終わってないぜ」

落とされたツインダガーの出力を、最大限まで引き伸ばす。

「なんだとっ」

ラウラのA I Cが解けた一瞬を狙って、俺はスラスター全てを用いた本気の瞬時加速を行う。それによりイズムルートは一気に最高速度まで加速、さらにその際に自らに回転を加えることでワイヤーを引き千切る。

その加速をさらに強める、それによりイズムルートは限界を感じてか警告音<sup>アラーム</sup>を鳴らす<sup>マッハ</sup>が、これ以降の戦いでも音速を超えられないようじゃまだまだだ。だからまだ頑張ってくれ、イズムルート。お前は伊達<sup>フスフィシカ</sup>に閃光の名を名乗ってるわけじゃないだろ、音速くらい超えられないでどうする。

その思いに応えたのか、警告音が聞こえなくなる。音速を超えた先にあるもの、無音の空間。何もかもが止まって見えその中を自分が飛んでいる感覚。



そうだよ、これだ。

俺が求める景色、俺が求める感覚。

何もかもが彼らにとっては一瞬の出来事、俺にとってもこの景色は一瞬のものでしかない、だがこの一瞬さえつかめれば……。俺は負けない。

この景色が終わる前に、全てを終わらせる。そう感じて瞬時に翡翠を展開させる、攻撃態勢に入る。

そう、全ては、一瞬だ。

「リジウム・ラスー  
音速居合」

今まで加速してきた力学的エネルギーを全て一撃に繋げた攻撃、速度を増すごとに威力を増す。音速を超えた攻撃は言うまでもなくシールドエネルギーをこっそりと持っていく。

スラスターを逆方向に噴射することで停止し、ラウラの方を伺う。

「完全に捕らえたと思ったんだが……甘いのは私だったようだ」

「いや、俺もあれは博打だったから」

それにしても、今のはなんだったんだろうか。

博士がイズムルートを弄ったと分かってから、スペックの確認はした。だが最高速度は音速を超えてはいなかった、精々以前の二割

増し位。やはり形態移行フォームチェンジへの前兆なのか？

今は考えても分らないので後で博士に聞くとして、とりあえずは今の感覚だけは忘れたくない。音速の先にある世界、その景色、その感覚……。

## 第六話 音速の先にあるもの（後書き）

いかがだったでしょうか、楽しんでもらえたら幸いです。

今回はちょっとヴァディム君に頑張ってもらいました、というのもせっかく閃光という字を当てたので全ISの中で最高速を誇ってもらいたいんですね。

個人的に、戦闘において一番大切なのは速さと思っているんで。

ではでは今回はこの辺で。

## 第七話 紅い左眼と碧い右眼

模擬戦で失ったエネルギーの回復も終わり、コンビネーションの特訓をする。

相変わらず、俺もラウラも個性がある機体だからこれまた難しいのなんのって。でもまあ、それぞれの個性を生かして戦闘状況を考えるのはこの先ISでは必須になってくるだろうから、いい経験になる。

段々とお互いの動きにも慣れてきて、いい感じにコンビネーションも取れてきた。多分この練習した後にあのAIC特訓をした方がいいんじゃないのかもしれないなかった。

「よし、少し休憩としよう」

とラウラが言ったので、俺は自室へと一度戻った。

アリーナから寮はちよつと遠いが、こつから唯一の男子トイレに行くよりは断然近い。それにあの封筒の中身も気になるところだ。

### 第七話

（紅い左眼と碧い右眼）

自室に戻って鍵を閉めた俺は、サバイバル用品入れの中からライ

ターを取り出してあぶり出しを行う。

紙を燃やさないように少しコツがいるが……、出来た。

『夕食前、生徒会室に来て』

生徒会室。

つまり生徒会長である更織楯無がいるところ、である。学園の長と自分で言っている彼女がどれだけの実力があるのかが気になるところだが、多分あのラウラよりも強いだろう。

更織楯無、専用機持ちでありながら代表候補生になっていない人の一人。自由国籍権をこの年で取得していて、それを行使しまくっているらしい。

そして、彼女もまた十一月の誕生石に選ばれた人材。  
トバース

【霧纏の淑女】  
ミステリアス・レイディ

彼女が扱うB S I Sの名前だ。

スペック上では、専用機レベルのISとなんら変わりがないが霧纏の淑女には他のISには搭載することが不可能なものが搭載されている。

それが「アクア・クリスタル」である。左右一対の浮遊パーツからナノマシンで構成された水のヴェールを展開することにより、拡張領域に関係なく様々な武器を作り上げる。さらにそれは装甲にもなり、IS全体を包むのも容易である。

彼女の持つ武の才能とも併せて、かなり脅威になりうる。が、今のところ敵対勢力でもないので大丈夫だと思う。

多分、アレにはまだまだ不明なところが残されているはずだし、今のイズムルートで太刀打ち出来るかと言われれば正直勝率は六：四……いや、七：三で俺が負けるだろう。いくら音速を超えることが出来てもまだそれをものに出来ていない、そんなんじゃ学園の長に勝てるわけがない。

が、味方にしておかないと痛い。

B S I Sは世界に十二しかない。その内一つは姉さんが所持しているし、情報によるとあの組織でさらにもう二つ程所持しているらしい。今現在確定できているコアは四つ、確定できていないが敵が持っている可能性が高いコアが二つ、残り六つのコアの一体いくつがこっち側に回ってくるだろうか。

B S I Sではないが、一夏のI Sはまた特別だ。あいつも味方に付けていた方がいい、一年の専用機持ち全員も交渉対象と考えるのも良いが戦争に巻き込むのは少人数のほうが良い。

「タイムリミットは刻々と迫ってきているのによっ……」

だが、今は突き進むしかない。

気持ちを切り替えてアリーナに向かう。

アリーナに戻ると、ラウラはAICの特訓をしているところだった。複数のマガジンに空に放り投げて、それら全てを完全停止させる。いずれ集中力が切れて落ちるがまた放り投げて……を繰り返しているようだった。

「ただいま」

「ん、ああ。始めようか」

「それにしても、ラウラが弱点を克服しようとしているなんてな」

「私の戦法の幾つかにはこのAICが用いられている、一対一の効力は凄まじくても一対多の状況でも使えるようにしないとこの先が危ない」

いつもラウラが急な戦闘を用心しているのか、それともこの先の未来を見越しているのかは知らない。たぶん前者だろうが、その心がけは本当に凄いと思う。

俺なんかとは違う、戦争への執念みたいなもの。

「本当にラウラは優しいな」

「んなつ、私はただ戦争のためだけに作られ……」

「そんなことはない」

ラウラの言葉を途中で遮るようにして俺は言葉を紡ぐ。

「ただ単に戦争に勝ちたいのなら、味方を滅ぼしても構わない戦法

を取る」

「アレか」

「だが、今回の戦闘でラウラは『民間人、及び味方がいる状況下』での模擬戦を望んだ。つまり、目標に対して攻撃を当てつついかに他人にダメージを与えないようにする動きをしていた」

俺が二丁拳銃でラウラに射撃していた時も、ラウラは俺と自分の間に誰も置かなかった。

「……」

「だから、ラウラは自信持てよ。俺はラウラのことを信頼してる」

「いいのか？」

「いいものにも、ラウラはラウラだ。他の何者でもない」

「私は、人とは違うんだぞ」

「それなら、俺だって一緒さ」

首をかしげるラウラをよそに、俺は辺りを見回す。幸い誰も見ていないようなので、ラウラに紅い左眼をさらす。

「っ、それは……」

「ラウラの『ヴォーダン・オージェ越界の瞳』とは異なるけれども、似たようなもんだ。俺が開放すれば、力を得れる」



その時に失った代償として、俺は寿命の八分の一を渡している。  
どっかの死神よりは格安な取引だ。

「何故、お前はそれを望んだ」

カラーコンタクトを戻している途中にラウラに問われる。

「俺を必要としたイズムルートに乗るため、そして姉を懲らしめる  
ために……かな」

もう一つだけ理由があるけれども、それは今語る必要はない。

「……強さとは、何だ」

「いきなりなんだ。だが……そうだな。使すべき力を使うべき時に  
キツチリ使えること、かな」

形振り構わず力を放ってしまえば、それは暴力となんら変わりな  
い。

力を持っただけでも使わずじまいであれば、それは宝の持ち腐れだ。

そういうコントロールがキツチリできてこそ、その力は強さへと  
転化される。俺はそう思っている。

「ラウラにはラウラの意味が、俺には俺の意味がある。そして持つ  
力は人それぞれ違う、だから力は使いどころで様々な形を作るんだ」

「私は、まだ遠いな」

「俺だって、まだ遠いさ。だが、強さにゴールなんてない。走り続けること、突き進み続けること、その一瞬一瞬をかみ締めて強くなくていくんじゃないか？」

「それが、お前の強さか」

「まあ、そんなもんかな」

ラウラはふっ、と少し笑うと。

「私の強さは間違っていたようだ、力を得るだけでは意味がない……。お前に教えられたよ」

そういうラウラの瞳は今までで一番輝いているように見えて。

その表情に、思わずドキッとしてしまっていた。

特訓も終わり、後は夕食を残すだけとなった。が、俺は生徒会長さんからの呼び出しで生徒会室に来ていた。

コンコンコン、とノックを三回して名前と用件を言つとすぐに通された。

「はあい、待ってたよ」

ドアが閉められてから、楯無さんは話始める。

「どうしてここなんですか？」

「ん、まあ秘密情報だし。それに……ここなら監視も盗聴もないし、声色が変わった、さっきまでのおちゃらけた感じよりも何段階か真面目になんた感覚。」

「その用件とは？」

「君、その左眼見せてみてよ」

カラーコンタクトであることは、既にバレていたようで俺は素直に従うしかなかった。

「ふうん、結構綺麗だね」

「俺にとつちや、ただの悪魔との契約の証ですよ」

「それで、君は絶大なる力を得た」

「……そんな大した力じゃないですよ」

「人並み外れた身体能力、動体視力に加えて脳細胞の活性化」

「よく調べましたね」

「まあ、悪魔と契約した人のほとんどがこれを結んでるからね。さらに君は特殊な契約も結んだ」

そこまで知ってるのか。

「過剰なまでに君は『速さ』を求めている、それは君がロシア軍で訓練していた時から明らかだわ」

「ちょっと待ってください、俺はロシアにこそいましたが軍と関わりはもってない」

俺の記憶をたどってみても、俺は軍にいた覚えはない。

「そのために呼んだ、とも言えるわ」

「一体何が……」

言いたいんですか、そう言おうとしたが口からは出てこなかった。その代わり、俺の目の前にはISを部分展開させている楯無さんがいた。

「私は真実を知りたいの、ゴメンネ」

半透明だった水が、紫、赤、緑、黄……様々な色に変色していき、気がつけば身体の中に入っていた。身体に異物が入ってきたのを感じて凄まじい吐き気を催し、すんでのところで自意識を保つ。

力を解放した時と同じように何かが身体に流れていることを感じるが、今は嫌悪感も感じる。それと同時に、頭の中をぐちゃぐちゃにかき混ぜられているようにぐるぐると回る。

そこに自分はいるはずなのに、自分が自分じゃないような感覚。

『おかえり』

自分の姿、自分の声でそう告げられる。意識が朦朧としていく中で、それだけがハッキリと聞こえる。

一体何に対して俺はそう言っている？

一体何故俺はこうなっている？

それ以外にも様々な疑問をもったが、それを考えるだけの余力はもう残っていない。

俺は意識を手放した。

最後に、自分の姿をした紅い両眼の少年の笑みを脳裏に刻み込んで。

## 第七話 紅い左眼と碧い右眼（後書き）

いかがだったでしょうか。

ちなみに、容姿のイメージは皆さんのご想像におまかせしますが、自分はエヴァのカヲル君（瞳だけ色違い）をイメージしています。

さて、今回はまた新たな事実が発覚。楯無さんのISをB S I Sとすることにしました。設定的には本編とそう変わりないですが、色々とスペックだったり特殊効果だったりした後付けで強化されていく感じです。

そしてラウラちゃんに対してもフラグをちょいちょい立ててみましたが、どうだったでしょうか。その辺の感想もいただけるとうれしいです。

次回は主人公の過去を少し明らかにしちゃいたいと思います。

## 第八話 虚栄だった真実

「どうしてそんな顔をしているのです」

「……ボーデヴィツヒか」

「さっきの訓練では好成績だったじゃないですか」

「あんなもんは意味がない、実際の戦争ではもっと厳しい状況下で戦わなければならないんだ」

「なら何故……」

「俺は決めたんだ、姉さんを倒すことを。だからそのためなら何だってするさ」

「戦うことでしか、自分を実感できない？」

「よく覚えてるじゃないか」

「少佐の言ったことは、忘れないって決めましたから」

「そっかい、ありがとよ」

## 第八話

く虚影だった真実く

今のは……、ロシアでの記憶、失っていた、いや封じられた記憶。最低でも俺とラウラの両名はこの封印にかかっているだろう。

いや、これは俺が望んだことなのか？

『おかえり』

「……………」

目の前には俺がいる、瞳の色だけ違って後は全部が俺。

『久しぶり、ですね』

急に久しぶり、なんて言われても……。いや、一つだけ心あたりがある。

「クロノーチエか？」

『当たりです、よくも代償を……といっても今の私には必要なかったので手放しただけです』

「どういうことだ？」

『もう既に、検討はついているでしょう』

「……………すまない」

『構いませんよ、どの道を進んでもこうなることは分かってましたから』



「どういうことだ」

『始まるんですよ、私の大好きな大きな戦争が……』  
「ロシア」

「そんなに迫ってきてるのかよ」

あれから既に五年は経っている、しかしいくらなんでもこの戦争が起こるには確定要素がなさすぎる。

アイツらだってこんな速い展開は望んじやいないのか？

『でも関係ないね、貴方と私なら』

「全ては、一瞬だからな」

『くくくつ……、あつはははは。やっぱり貴方は面白い、いや私を楽しませてくれる。君がエメラルドと共にある時からずっとね』

「なんとも言えがいい、俺は悪魔落ちなどしない。俺はあくまでも俺だ」

『私だって貴方を悪魔落ちさせる気はないさ、寧ろ共存を望んでいるんだ』

「共存？」

『さしずめ三位一体トリニティってところが、貴方と私と彼女の』

「……面白い」

『それに、君の身体を借りることで私に生じるメリットもある』

「まだ生きる気かよ」

『貴方には分かりませんよ、長く存在し続けることの楽しみを。世界が変わる瞬間を目撃し続けることが出来る楽しみを』

「それがたまたま今回だっただけか」

『そうですね、今回は今までで一番強力な変化だ……貴方に感謝しない』

「で、再契約にかかる代償は幾らだ？」

『既に頂いています、“<sup>トバース</sup>十一月の誕生石”の選別者からね』

「そうか、って楯無さんが？」

『何度輪廻を回っても、彼女が選んだ者は皆心優しい……』

「今回もそうだというのか」

『ええ、なんら変わりない……。しかし言うならば、誕生石の連中もこの状況は初めてのようで』

「どづいことだ？」

『このISを用いた世界はどの輪廻にもなかった、だから連中も期待していますよ』

「勝手にされても困るんだが、第一俺がすることはただ一つだ」

『そこが私との意見の相違なんです、なんとかありませんか？』

「残念ながらもねえよ、これは俺の信念だ」

『“誰一人として殺さない戦争”……正直無理があるんじゃないでしょうか』

「だからこそ、速さを手にした。後出しでも間に合うくらいの速さを」

『確かに、今の貴方は音速を超える速さを手に入れました、ですがそれでは届かない手もあるのでは？』

「……」

『まあ、いいでしょう。貴方も戦争を味わった一人です、そしてこれを観れば気分も変わりますよ』

「ありがとう」

『いえいえ、例には及びません。私が望むのは変化と戦争、それも大きいければ大きい程良い。貴方はそれを私に与えてくれると信じていますよ』

「期待に添えられるかどうかは、真実を知ってからだ……」

『お見せしましょう、真実を。そして嘆くが良いでしょう、喚くが

良いでしょう、昔から決まっていますよ……知らないほうが良かったことの方が多いことを』

あの当時の俺は、ただただガムシヤラにもがいていた。

事件の後、父が作っていた二機のISについて知った。

一つは、後に俺のBSISになる五月の誕生石エメラルドのコアを持つイズムルート・フスプイシカ。もう一つが四月の誕生石ダイヤモンドのコアを持つ姉さんのBSISだ。

女である姉さんはもうこの時期にはBSISの適合者として誕生石から認められていた、そして母さんは姉さんが操るBSISによって殺された……。

その時の姉さんの表情は忘れることは出来ないだろう、いや、しないのだ。このことを胸に刻み続けていつかは姉さんに分らせてやる、あの行いがどれだけ愚考だったことを。

流れていく真実と自分の虚影を重ねながら、自分の半生を振り返る。

その日は生憎の雨だった、日本では超大型台風が接近しているというニュースがひっきりなしに流れつつけていた。

俺は台風が怖くて、あの時代では珍しく大型シエルターまで前日から避難していた。

「いくら台風が接近していても、流石にこの子の手入れは済ませておかないとね」

そこにあつたのはロシア代表であつた母さんのIS―凍える風ヴェーチェリオ・リョートウ、母さんはクリスタルのペンダントとして首から下げていた。

母さんのポリシーとして、『自分を支えてくれることへは最大の感謝を』というのがある。それだからこのISの手入れというのは、母さんにとってヴェーチェリオに対する感謝の表れなんだと思う。

「僕も見えていい？」

そして、そんな母さんが大好きだった。

「いいわよ」

母さんが作業している隣で、邪魔にならないように眺める。自分がどうやっても動かせるものじゃないことを理解していた、だけれどもISというものには凄い興味があつて暇さえあれば色々調べていた。

「かつこいいね、やっぱり」

「将来はヴァディムが母さんにISをプレゼントしてくれるのかな？」

「うっん、僕はね頑張つて男の子でも乗れるISを作つてみたい」

「……そっか」

「それで空を自由に飛んでみたいの」

「アリサと一緒に飛べるといいわね」

「……お姉ちゃん、まだ帰つてこないのかな」

「本当に、心配……」

「そんなに心配してた？」

「お姉……ちゃん？」

ISを展開していた姉さんがいた、だがそれが姉さんだとは信じられなかった。

そこにいた姉さんは、瞳の色が逆転していた。白い瞳孔が見開かれ、狂ったような笑みを浮かべている姉さんは、当時の俺にとっては恐怖でしかなかった。

「ヴァディム、逃げなさいっ!!」

「フリーズ  
強制停止」

逃げようとしても、逃げれない。

足が全く動かない、口を開こうとしても開けない。

「あはははははははは、いい顔してるよヴァディム。でも、もつともつとイイ表情顔見せてほしいな」

その言葉を発し終えてから、姉さんは一本のナイフを投げた。

全ては、一瞬だった。

「うつつ……」

母さん？

うめき声しか聞こえない、母さんがどうなっているのかもわからない、ただ一つ分かるのは……。

「やっぱり変わらないな……って、強制停止させてるんだったね」

さっきまでなんともなかった姉さんが、アカ色の斑点をつけていたことだった。

「んじゃ、ヴァディム。君は運命から逃れることは出来ないの。ゴメンネ、でも恨むなら……その人を恨みなさい」

「母さんが何をしたっていうのさっ!!」

叫んでも、喚いても、涙を流しても、何もない。

既に母さんは息をしてなかった、だけれどもあの頃の俺には何も分からなかった。ただただ、あの時の姉さんの姿がエンドレスループしていた。

事件の後、父が作っていた二機のISについて知った。

一つは、後に俺のBSISになる五月の誕生石の<sup>エメラルド</sup>コアを持つイズムルート・フスプシカ。まだまだ実践投入見込みは低かったが、この時点でイズムルートは俺を選んでいたらしい。

もう一つが四月の誕生石の<sup>ダイヤモンド</sup>コアを持つ姉さんのBSISだ。既に実用化がほぼ期待されていて、姉さんがいつ乗ってもおかしくない位だった。

その姉さんが事件の数日前に行方不明になって、それと同時期に父の研究所からイズムルート以外の全てのISが盗まれた。

明らかに、何かが仕組まれている……今となっては分かるが正直あの頃の自分はまだまだ幼かった。

この後俺は父に引き取られてロシアに行き、そこで母さんが入っていたロシアで一番のIS軍隊で訓練をしていた。

二年も経てば、次第に戦いとは何かを学んでいき自分なりに戦いにおいて速さが一番必要だという結論を出していた。そのころからイズムルートの基盤が出来てきて次第に自分に馴染む様になってきた。

ここから、俺の真実だと思っていたものは全て虚影だった。

だってそうだろう？

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。階級は少尉だ」



全ての歯車は、今ようやく意味を成す。

## 第八話 虚栄だった真実（後書き）

スイマセンっ、一話じゃ収め切れません。  
という訳で、過去編に突入します。

最初からちゃんとプロットきっちり立ててれば、こんなに早い段階で過去編に入らなかった……。

と今更嘆いてもしかたがないのでここは頑張りどころです。  
さて、今から始まりました過去編ですがコンパクトにまとめたいと思います。

多分後二〜三話内には終わるんじゃないかと予想しつつ。

## 第九話 契約、そして輪廻のハジマリ

「そう言えば、今日は大佐が昼食当番でしたね」

「厳密に言えば俺のグループだが、どうした？」

「いえ、今日は金曜日なものですから」

「そうだな、金曜日はカレーの日だ」

「……大佐からしてみれば毎日がカレーの日では？」

「それも一理あるな、それに金曜日がカレーなのは確か海軍発祥だ」

「勉強になります」

「それにカレーは良いんだぞ？ 栄養もたくさん取れるし、色んな種類があつて楽しめるし、何より……」

「大佐、そろそろ昼食準備を」

「そんな時間だったな、では済まないな、ボーデヴィツヒ」

## 第九話

く契約、そして輪廻のハジマリく

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。階級は少尉だ」

何故ラウラがこのロシア軍に？

「今年いっぱい、このロシア軍のIS隊で軍事指揮をとってもらうこととなっている。歳はまだ若い、ISのセンスや戦闘知識はかなり高い」

今のラウラとは違って、まだ眼帯をしていないラウラ。その綺麗な赤い双眼に見とれながらも、俺は真実を見続けた。

「俺は日崎ヴァデーム、階級は気味と同じで少尉。とまあ、一年よろしくな」

挨拶が終わって手を差し伸べたが、その手はとられる事はなく。

「……」

ラウラはとつとどこかに行ってしまった。

「何か悪い事しましたかね、俺」

「さあ？ それより、自分のISのチェックを行ってね。本日はほぼISの訓練だから、自主トレってことで」

「了解です、准将」

それから俺はイズムルートをチェック（順々に出来上がっていく機体を見るのは、中々に面白い）を入念に行い、自主トレに移行す

る。

今はまだ、イズムルートが完全に動かないので俺はこういう地道な訓練を積み重ねる必要がある。

そしてその自主トレ中のことだった。

「ちよいと、お前さん」

極寒の地とも謳われるロシアでの長距離ランニングでいつものコースを回っていた俺に、とある老人が声を掛ける。

この老人を俺は知っている、見た目よりかなりの年数を生きながらえているクロノーチェル。その仮初めの姿だ。

「俺のことか？」

「そうだ、お前さんだ。ちよいと時間はあるかね」

「はあ、別に暇なんでいいですけど。……今日はちよつと楽をすることにしよう」

「それがいい、寒いから家にどうだい？」

もしかしたら拉致監禁されるんじゃない……とあの時も思ったが、ロシア軍の少尉ともある者がこんな老人に拉致監禁されたんじゃない俺の顔が持たない、とも思い、その考えはすぐさま却下した。

老人の家には何やら変な文様が家中に散りばめてあって、なんだか気味が悪かった。

「さあ、そこに座るがいい」

「ありがとうございます」

椅子を用意してもらい、それに座ってから辺りを見回して警戒する。盗聴、監視、それらの類があるかないか位は大体察しがつくが、この家からは感じなかったのでとりあえずは少しだけ気を緩める。

「さて……話なんだが、お前さん。力が欲しいとは思わないか？」

「力？」

「一目見て分かる、お前さんは心に多大な闇と憎しみをもっておる」

「っ、それがどうした」

「今のお前さんには何も出来やしないよ」

「あんたに何が分かる、今の俺はあの時とは違う。それにもう少しすれば……」

「五月の誕生石の力を手に入れる？」  
エメラルド

「……何故それを知っている」

「何、伊達に輪廻を何度もくぐってきてではないさ」

何を言っている？

今の俺には分かるが、先ほども言ったがこいつが時を司る悪魔。

クロノ・チェル

「どうだ、一つ契約を結んではみないか」

「契約……」

「そうだな、お前さんの寿命を八分の一程寄越せばいい。それだけでお前さんは人を超えた力を得る」

「……」

普通なら信じられないだろう、いや、普通なら信じないだろう。こんな奇妙な老人と契約？

そんなことをしただけで得られる力なんざたいしたことがない、と大多数の人間が思うことになるだろう。

「分かった」

だが、俺は力を欲した。

相手はもはや人ではない、ならばこっちだって人じゃなくてもいい。悪魔に魂を売っても、別に俺は構わなかった。

もう母さんは戻ってこない、あの日常は帰ってこない。

「俺は力が欲しい、たった八分の一の寿命なんざ支払ってやる」

『やっぱりいつみてもここでの貴方は面白い』

いきなりなんだ。

『いや、君が真実にひれ伏すところを観に来ただけだ』

俺は決めたんだ、真実からは逃げないことを。

『それはそれでいいんですが……あ、契約が始まりますよ』

「……分かった、それでいい」

「勿体無いのう、そんなに綺麗な瞳なのに」

「なら変えるか？」

「くくつ、全然その気はない。寧ろ楽しみだ」

「ふん……まあいい」

老人が俺を中心として魔法陣を書き始め、そのまま契約の言葉を紡ぐ。

「契約、汝……我の力を欲するがままに、代償を払わんことを」

頃合を計らい、俺も契約の言葉を紡ぐ。

「契約、我……生命を捧げ、我が身を捧げよう」

フデイツ・チーニク・ヴァミィ  
「承認した」

その刹那、書き終えた魔法陣が俺の身体に張り付き、さらにどん



どん上に向かっていく。何かが蝕まれる、どんどん混ざっていく。

「ぐっ、あぐがあああああ……」

それらは最終的に左眼に集約されていく。

多大な痛み、どの拷問よりも強い痛み、そしてそれとは別に確かに感じる身体に流れる自分とは違う何か。

「ほう、これはこれは……」

数分後、痛みに耐えた俺は老人……いや、もう一人の俺をみた。

「なっ、姿が」

「いやあ、感謝しますよ。この身体は引き締まっていたいい」

明らかに口調が変わっていて、それはさながら紳士のようなだった。

「一体何が起こっている」

「一言で表すなら、輪廻……ですね」

「世界は輪のように回り廻る、それが輪廻」

「よく分かりましたね」

「それにしても、なんだか自分の身体じゃないくらいに重いんだが」

「貴方に八分の一程悪魔の血を流しましたから、慣れなくて当然で

すよ」

「はあ、そういうことは早めに言ってくれよ」

「いやはや、ですがそれでも貴方は契約を施す……違いますか？」

「……」

肯定する代わりに、無言で辺りを見回す。

身体能力の向上、および動体視力の強化と脳細胞の活性化。力を解放することでそれらは発揮されるが、普段の行動でも今までよりかは大分変わってくるらしい。

それと後二つ、時間を少しだけ止める力と自分自身の記憶を封印する力。

前者は、クロノチエル時を司る悪魔との契約では絶対というほどに必要な力なんだそう。なんでも、一回で三秒止められるらしい。三秒って、なんだか短いような気もしないこともないが実際は結構長いし、今となっては音速への移行までの時間を稼げるのでいい。

そして後者は、なんか必要になるときがあるらしい。そしてその力を利用していることから、あいつの言ったことが正しかったというところでもある。

それに支払った代償は、寿命の八分の一。そして契約した証として左眼に刻印を押され、俺の左眼は紅く染まった。

「では、来るべき時にまた逢いましょう」

「ああ、分かった」

気がつけば、俺は最初にクロノーチエルに声をかけられた場所にいた。

狐に包まれたような感覚だったが、ガラス越しに見た自分の瞳を見てこれが真実だと知った。

このまま軍に戻っても怪しまれるので、コース上にあるレイヤー御用達の店でカラーコンタクトを買った。試しに付けてみたが、違和感はそうなかったなのでこれで行くことに。

「只今戻りました」

「おお、ヴァディム。いいところに帰ってきた」

「一体何が？」

父は嬉々とした表情を浮かべて、俺に近寄ってくる。

「完成したんだよ“イズムルット・フスフィシカ翠玉の閃光”が」

父に連れられてみた、イズムルット。

初めての感覚……とは言いがたかった、以前に感じたような感覚？

いや、前の適合者達の感覚かもしれない。輪廻により繰り返され、

より進化するように仕向けられてしまう世界、ゼウス世界支配の神の強欲のままの完全なる完璧になるような世界。  
「ソフリート・オブ・バーフェクト

まだ輪廻の途中ならば、運命はまだ決まっちゃいない。輪廻の収束、それを告げる鐘さえ鳴らなければいい。

「これが、俺のIS。……俺の翼」

「ヴァデイム、本当にすまない」

「いいよ、気にしないで。俺は俺の意思で戦うし、それになにより  
エメラルド五月の誕生石は俺を選んだし、タイアモンド四月の誕生石は姉さんを選んだ。これだけでもう十分に俺がイズムルートとともにある条件は揃ってる」

「しかし……」

「今更何を言うのさ、父さんは束博士が託したコアを無下にするのかよ」

「……」

「父さんとして、科学者として、最高だよ本当に……そう思っている俺の気持ちまで無下にするのかよ」

「俺はお前が……」

「大丈夫だよ、俺には母さんの血が流れている。それにイズムルートだってある」

「……分かった。今からイズムルートについて説明する」

これが、俺が輪廻の歯車として動き始めた瞬間でもあり、俺の人生の一番のターニングポイントでもある。人の皮を被って、俺は生きる。

全ては、その一瞬のために。

## 第九話 契約、そして輪廻のハジマリ（後書き）

いかがだったでしょうか、第九話です。

ちなみに、この作品で扱われる悪魔や神々やは実際の名前からちよこつともじったものが多く、正式なものとはちよつと違うのでその辺は許してください。

さて、今回はオッドアイになる経緯を書いてみました。

個人的に、かなり厨二臭くしてみたんですが……、どうでしょうか？

この過去編はコンパクトにまとめると決めたので、ちよつと中身がスカスカしてますが、ご愛嬌ということで。

これからのストーリーにも関わってきますし。

この過去編もいつか当時のヴァディム君の視点でしっかり書ければいいなと思いつつ。

では。

## 第十話 囚われの過去

「大佐は、どうしてISに乗るんですか」

「まあ、空だって飛べるし」

「そういうことを聞いているのではなくて……」

「あまり人のことを詮索するもんじゃない、ボーデヴィツヒ」

「は、はい。申し訳ございません」

「そこまでかしこまらなくてもいいけれど、これを聞くにはまだ早い」

「まだ？」

「言うべきときがくれば、俺から言うよ。……だから、待っていてくれないか」

## 第十話

～囚われの過去～

「今日はイズムルートのデータ収集の日でしたっけ？」

「ん、ああそうだった」

「少佐、ボーデヴィツヒと模擬戦してみてくださいよ」

「ええっ、なんか企んでない？」

「そんなことないですって、それに少佐もボーデヴィツヒさんも今のところ負け無しなんですよ」

「どう考えてもボーデヴィツヒが勝つじゃないですか」

「少佐……。やらなかったら今度からカレー停止にしていますよ、私のコネで」

「よし、気合入れて頑張るぞー」

「そこまでカレー好きなんですか」

「ああ、好きだ」

「……っ、とつとと行きましようよ」

「お、おう。ってなんでそんなに顔が赤いんだ」

「気のせいですー！」

そんなこんなでスタジアム。事前にイズムルートのチェックは全て終わらせているし、今日は俺の気分も結構高ぶっているから良いデータがとれるといいんだが。



「……始める」

「ああ、よろしく願います」

開始の合図と同時に、俺は一気に間合いを詰めて打鉄用ブレードで切りかかる。

「温い、温すぎる」

「っ……」

見切られていた俺の攻撃はアクティブ・イナーシャル・キャンセラで簡単に停止する。

「動きが単調すぎる、だから私に気づかれる、攻撃を許す」

大型レール砲カノンの装填が確認され、それが俺に向かって放たれる。

声を出す暇さえなく、俺はスタジアムの壁に突きつけられる。シールドエネルギーは今ので三分の一も持っていかれ、正直愚かとかいいようがなかった。

「まだまだ、これからだろ」

「少しは私を楽しませてくれ」

「じゃあ、まずはこれからだ」

現在の俺の十八番でもあるマルチ・イグニッション・ブースト連続瞬時加速を用いて、不規則な移動を行いながらラウラに近づいていく。

これならA I Cにロックされることもないし、何よりハイパーセンサーを勝る機動力があるので攻撃開始にはもってこいだ。

「だから温いと言っているだろうに」

……それも今のスペックなら、の話だったようだ。どう考えてもこの時期ではイズムルートはまだ完成といっても、プロトタイプがという意味で使われているに違いはなく故に改良を重ねていた。

というわけで、簡単にA I Cに絡めとられている俺。なんとか情けないねえ、本当に。

「なら弱点を突くまで」

先ほど吹っ飛ばされたときに設置しておいたC 4爆弾を爆発させる。

「ひあっ」

一瞬集中が解けたのか、A I Cが解除される。その隙について俺はブレードで切りかかる。

「卑怯だぞ」

「なかなか可愛かったぞ」

「かつ、ふざけるな!!」

とりあえず一撃は入れることが出来たが、それ以降は体制を立て直したラウラに全て止められていた。

その隙にまたC4を設置しておくが、こんどはAICを発動してこない。

「お得意のAICはどうした？」

「同じ手には二度と引つかからんが、貴様にハンデをやるうと思つてな」

「そんなにビックリするもんなのか？」

「ふ、普段なら問題ない」

その言葉は多分本当だろう、AIC中は意識を集中させているから聴力とかも敏感になるんだろう。

「まあ、AICを使ってくれないのならこっちも勝手がつく」

連続瞬時加速を行い、C4をばら撒きつつラウラへと接近する。

「同じ手は二度も通用しない」

「これは悪いが俺の戦い方なんでね」

今度はアサルトライフルを構え、攻撃する。

「ふん、甘いな」

軽々とその弾の雨を避けて、ラウラは逆にこっちに接近する。

「お前も近接のほうがいいだろう？」

「ありがたいことだね」

ブレードを展開して、立ち向かう。向こうはプラズマ手刀を展開している。何度か鏝迫り合いを行い、互いの力量を測る。

「ふん、こんなものか……」

そういつて離れていくラウラに対して俺は空のマガジンを放り投げた。

「っ、C4か」

「残念、ブラフでした」

一瞬気が緩んだのを見過ごさずに、連続瞬時加速から攻撃を行う。その攻撃中も加速を続けて、ラウラを地面に叩き落とす。

「なかなか面白くなってきたじゃないか」

「全ては、一瞬だ」

「何を言っている」

ラウラの興がそがれない内に、俺はあらかじめばら撒いておいたC4を全て爆発させる。

「なっ、まさか」

その上、俺はガトリングガン二丁を取り出してラウラに放つ。

爆風にまみれ、尚且つ空から振る鉄の雨には流石のラウラでも対応し切れなかったようだった。

ふうむ、こういう戦い方もあるのか。参考になったな。

『そこまで、もういいぞ二人とも』

「了解、父さん」

「ま、待てっ」

「ボーデヴィツヒ？」

「……今度は負けない」

「ああ、また相手してくれると助かる」

この模擬戦がきっかけとなって、俺はラウラと仲良くするようになった。

「大佐っ、今日もお疲れ様です」

「ボーデヴィツヒも、お疲れ様」

あれから半年、俺は大佐までラウラは少佐まで昇格していた。後数ヶ月もすればラウラは自国であるドイツへと戻っていく。それでも、一番の収穫は自分には戦うことしか出来ない『人形』だと思い込んでいたラウラが普通に隊の皆とも話が出来るようまでになったことがあげられる。

どうしても俺が記憶封印を行った理由が未だ見つからない、というよりは寧ろ良い方向に向かってないか？

「ボーデヴィツヒ、今日はお前が食事当番だったな」

「はい、今日はシチューです」

「そうか、今日の晩飯はシチューか」

「いえ、昼食ですけど」

「……この際は何でもいいか」

「何かいいましたか？」

「い、いや。何も言っていないぞ」

「大佐っ、今日はありがとうございました」

「俺のほうこそ、これでまたイズムルートも喜ぶさ」

とある日の模擬戦が終わって、ラウラと話す。基本的にはずっと

ラウラと一緒にいて、なんだか初々しいカップルみたいで自分のことながら微笑ましくなっていた。

そして、徐々に速さを増していくイズムルートが現在の形に近づいているのを見て、感動をしつつ。

「日を増すことに速くなっていったる感じがします」

「そうだな……イズムルートがそれだけ高みに生きたい証拠かもしれない」

「ISに意識など存在しえるんでしょうか」

「さあな、だけどそうだったらいいなと思うんだ。俺は」

「それは何故です？」

「一人で戦うより、二人で戦うほうがいいじゃないか。精神的にも」

「なるほど、大佐らしいですね」

「俺らしい、か。それが一番しっくり来るならそれがいいだろう」

「はいっ」

「大佐……、今までありがとうございました」

「こっちこそ、ボーデヴィツヒがいてくれて凄い成長出来た気がする」

るよ」

丸々一年が経ち、ラウラがドイツに帰る日の前日。ロシア軍ではラウラの送別会なるものをしていた。

最初は誰とも接しなかったラウラは、今は皆と一緒に笑えるようにまでなった。

「この一年、本当に色々とありました」

「ああ、そうだな。始めの方はボーデヴィツヒは凄く冷たかったかな」

「っ、申し訳ございません」

「いやいや、いいんだ。今は違うだろう?」

「はい、本当に大佐には感謝してもしきれません」

「俺だけじゃなく、隊の皆にも感謝すべきだな」

「はい」

「今度、俺もドイツでのボーデヴィツヒを見に行くから」

「本当ですか」

「ああ、本当だ。それにドイツの力も推し量れるし」

「私はついですか……」



「冗談だ、お前に会うためにドイツに行ってる」

「大佐……」

「はいはい、ラブコメはいいから。今日は楽しんじやいませよ」

ラウラが旅立ってから早二ヶ月、俺はドイツへと旅立った。ロシ  
ア軍からの命令があったので、という建前を連れて。

だが、そこで俺が見たのは惨劇だった。

「この度はどうぞいらっしやいました、日崎大佐殿」

「そんなにかしこまらなくてもいいですよ、俺はそんなに偉くはな  
い」

「いえ、これはわが軍のポリシーですから」

「ボーデヴィツヒもそういうところは聞かなかったからな」

「……その件なんですが」

「少佐っ、大変ですっ！」

「何をしている、今は大事な会談中だぞ」

「申し訳ございません、ですが遺伝子強化試験体が暴走を」  
アドヴァンスド

「番号は」

「C-00037です」

「どうかしましたか？」

「いえ、こちらで実験中のISが暴走してしまったみたいで」

「なんならお手伝いします」

「それはありがたいんですが、いかなせん条約に反する可能性が」

「条約？ ああ……何も見なかったことにしてくれると助かる」

「……すみません」

「何のことでしょうか、俺はこのイズムルートの試運転に行くだけです」

行かなければよかった、そう思ったときには既に遅い。

後に悔やむから後悔なんだ、先にあるはずがない。悔やむのはいつだって何かが起こった後、そして無力な自分に憂いを感じる。

ボーデヴィツヒ、お前は何故そんな顔をしている？

何故そんなところで騒いでいる？

俺は何故、こんなにも無力なんだ。

## 第十話 囚われの過去（後書き）

いかがだったでしょうか。

次でこの過去編もフィナーレを迎えます。

さて、戦闘させてみました。

なんかちよっとチープな感じになったかもしれないですが、そこはあえてそうなるようにしました。臨場感があまりないような感じの戦闘、と思っていただけると幸いです。

次も戦闘ですが、こっちの方は頑張って臨場感が伝わるように頑張りたいと思います。

## 第十一話 真紅の双眼と黄金の左眼

「なあ、ボーデヴィツヒ」

「なんでしょうか」

「この間、聞いてきたよな。『どうしてISに乗るか』」

「はい」

「聞かせてやるよ、その理由」

「……はい」

「俺は、復讐をするためにISに乗ろうとしていた。けどな、そんなもんのためにISを使っちゃいけないって気がついた、これは人を陥れることの出来る凶器でもあるが、人を守ることの出来る希望でもある。ならば俺はその希望の方を選ぼう、とまあそんな感じだ」

「人を守るため、ですか」

「ああ、ボーデヴィツヒやこの軍の皆。それ以外にもたくさんの人々を守るために」

「良い決意ですね」

「そうだろ、これがあつたからこそ俺はここまで生きているし、これからもそうして生きていく」

## 第十一話

く真紅の双眼と黄金の左眼く

暴走を始めたラウラは俺が見たこともないぐらいに狂気に満ちていて、そして尚且つそれは自然と“鬼人”を連想させた。……いや、もっと言つならば“鬼神”だろうか。

「なんだよ、アレ」

「アドヴァンスト遺伝子強化試験体C - 0037でして……」

「そんなことを聞いてるんじゃないっ!」

「何をそんなに怒り狂ってるんですか」

「何故、ボーデヴィツヒがあんなになってるんだ。それに左眼が金色になっっているのも気になる」

「ボーデヴィツヒ……? ああ、あのゴミ屑の名前でしたね」

「ゴミ……屑だと?」

「ええ、ヴォーダン・オージエ越界の瞳適合前と後じゃ天と地の差だ。あんな屑、本当はすぐに処理すべき……」

「ふざけるなっ！」

俺は思わず相手を殴ってしまったていた、いや、殴らずにはいられなかった。流石に今の俺でも殴りはしないが、結構腹が立つ言葉だな、おい。

「ボーデヴィツヒは戦うための道具じゃない、お前らの人形でもない。俺が、俺が……」

「まさかアレに惚れたのか？ ふん、馬鹿馬鹿しい」

「っ……。ボーデヴィツヒを、ラウラを返してもらっ」

「処理していただけると、ありがたいんですがね」

アジン トウヴァ トウリー  
一つ、二つ、三つ……。

瞳を閉じて、『俺』はそう心の中で呟いたのだろう。次に眼を開いたときには、両眼が赤く染まっていた。

「……失せろ、俺が気分を害さないうちにな」

「は、はい……」

『この時の貴方は本当にカッコよかったんですけどねえ』

この先を知っているのなら、少し黙っていてほしい。今の俺の判断が正しいなら……いや、多分『俺』は負けるだろう。

その理由は明確だ。こっちも越界の瞳に対抗すべく、力を解放し

ているが……かなり分が悪い。まず、相手がラウラだということ。そして次に俺はラウラに一切危害を加えずに助けなければならぬこと、最後に、今までのラウラより各段に強くなっていることが挙げられる。

『それで、今の貴方は臆しますか？』

いや、全然。

そして、この時の俺も絶対に同じ考えだろう。ラウラに惚れてるなら、尚更だ。

『いまどきにしては珍しく、貴方は好きであることを恥ずかしがりませんね』

ラウラだからさ、きっと。俺はラウラだから好きなんだ、胸を張って好きだと言えるんだ。

「今、助けるよ。……ラウラ」

真紅の双眼が暴走しているラウラを捕らえる、三秒ルールトゥリー・セコンダが使えるのは七回。

その七回が結構重要になってくるし、その七回を活かせないと……。

「三秒ルール」

『早くも一回目、発動しちゃったねえ』

まずは一度様子見で使うのには悪くないが、それも期限があるものに使うのは解せない。三秒なんてすぐに終わるぞ？

と思っていたが、結構甘かったようだ。考えもなしに突撃するよな馬鹿じゃない、自分の事ながらそう思いたい。

イズムルートの機動力を利用して、一秒立たない内に後ろに回りこみ、そこからアサルトライフル二丁で連撃を加える。

すぐに三秒が経つが、ラウラに結構なダメージを与えられたはずだったが、それも空しく。

「はあっ？　今のでシールドエネルギーを250程度しか削れてないだろ？」

普通ならばあの攻撃はシールドエネルギーを半分削るには良い攻撃なはずだったが、その半分程度のダメージしか通ってない。

「ヌルイナ……」

「くっ、一旦離れないと」

AICを警戒して、ジグザクに後退したがその必要はないみたいで、今のラウラにはAICを使う気配が見られない。暴走しているというのもあるのか？

「オソイ……」

「マジかよっ」



と、次の瞬間には眼前に迫るラウラ。先ほどまで狂気に満ちて叫んでいたとは思えないほどに冷徹な瞳と、冷淡な声。

だが、それから感じられるのは多大な殺戮の感覚。

「クロス、クロス、クロス……」

「ぐっ、あがぁ……」

殴られ、蹴られ、切られ、撃たれ。

様々な攻撃を加えられて、俺もイズムルートもボロボロだった。今までこんな敵に出会ったことがない。

見てられないほどに、圧倒的な暴力。レッドゾーン機体維持警告域はもう既に超え、操縦者生命危険域へと突入する。

それでも尚、攻撃を続けるラウラ。

何がこんなにもラウラを苦しめる、何でこんなにラウラが苦しめられる？

「三秒……ルール」

それを駆使して、逃げるのが精一杯だ。その三秒ルールでさえ、後一度しか使えない。

「瞬時加速すら使えないか……なら」

何を考えたのか、三秒間で『俺』がしたことはただ一つ。

『ひゅゝ熱いねえ』

ほざけ。

「ナン……ダ？」

「ラウラ、済まなかった」

ラウラに抱きついていた。

「お前を苦しめてしまった、お前を助けてやれなかった。俺は無力だ、本当に屑だ。だからお前に泥を塗ってしまった、お前を傷つけてしまった」

「コロ……ス、コロス」

無常にも、ラウラの攻撃は止まらない。が、その手は徐々に弱くなっていつている。それに『俺』が抱きついているから、強い攻撃も打てない。

「もっと早く、来ればよかった。いや、もっと早く伝えておくべきだった」

「ハナセ、ハナ……セ」

「好きだ、ラウラ」

「タイ、サ……？」

「ああ、俺だ。日崎ヴァデーム、ロシア軍特別IS部隊の大佐だ」

「……大佐」

そこで、ラウラの意識は途切れてそれと同時に暴走は止まった。

「ラウラ……」

だが、そこで待ってたのはやはり厳しい現実だった。

「記憶喪失？」

「ええ、遺伝子強化試……ではなかった。ラウラ・ボーデヴィツヒは、ウォーダン・オーシェ越界の瞳に対応しきれなくなって暴走、そしてそのときに脳細胞に異常が起こり、記憶喪失になったんでしょう」

「それ以外に何か負傷はあったんですか？」

「奇跡的に他は何もありません、身体も貴方が頑張ってくれたのでダメージは皆無です」

「そうですか……」

「それよりも、医者としては貴方の身体の方が心配ですよ」

「こんなもん、ラウラが感じた痛みに比べちゃなんてことはない……」

「本当に、申し訳ございませんでした」

「何を誤る必要がある」

「正直、私はこのドイツ軍のやり方があまり好きではないのです」

「……」

「ISで、なにもかもが変わってしまった」

「だが、ISで悪くなったことばかりじゃない」

「そうですけど」

「……だが記憶を塞ぎたい気持ちは分かる、俺だって辛い」

「はい」

「ところで、これからラウラはどうなるんだ？」

「ええと、第一回モンド・グロッソ優勝者である“ブリュンヒルデ戦乙女”こと日本代表の織村千冬さんが特別コーチをすることになっています」

「そうか……なら、いい」

「えっと、どちらへ？」

「帰るんだ、ロシアに」

そう言って、無線機でロシアから要請を頼む。

……きつと『俺』も辛かったんだろう、たった一年とは言え初めて好きと言える人が記憶喪失になったなんてな。そうやって塞ぎこみたい気持ちは分かる、そして塞ぎこんでしまったのも分かる。

迎えに連れられて帰国した後、五日間『俺』は飲まず食わずで籠った。ラウラが受けた痛み、それとは程遠いがかなりの痛みを受けただろう。そして六日目、俺は記憶封印能力を使い……イズムルトを手にしたからの記憶を封印した。

それと同時に生まれたのが、俺が今まで本当だと思い込んでいた“偽りの記憶”。真実を知ること、今までの記憶が幸せだったかのような錯覚を受ける。だが、現実に向き合わないといけない。

どうやっても、輪廻に巻き込まれることは確かなのだから。

俺が運命から逃げるために……いや、立ち向かうことを恐れたからこそ使った能力。今の俺には、十分すぎるほどにその衝撃は大きかった。

「どうかな、お目覚めは」

「楯無さん？」

気がつけば、生徒会室で横になっていた。

「真実を知った気分はいかが？」

「なんというか……、その」

「残酷だった」

ズバリと言い当てる楯無さん。

「そうですね、俺が信じていたものは偽りだったし、なにより俺のせいでラウラを傷つけてしまっていた」

「輪廻を感じたでしょ」

「はい、今までより強く……」

「うん、君は合格だね。もう出て行っていいよ」

「用件はそれで終わりですか？」

「ええ。もう既に『診た』から」

「そうですか。では、失礼します」

なんだか物凄いやさっぱりとした感じで終わってしまったが、きっとこれでいいんだろう。俺はちょっと頭の整理がてら眠りたい……。夕食食べてないが気にしないことにしよう。

もうすぐ、トーナメントも始まる。あの時に言った言葉は、今でも変わらなく俺の中にある。ラウラが好きだって気持ちは変わらずにそこにある、これが終わったらラウラにまた伝えよう。

だから今は……、ちょっと一休みしよう。

## 第十一話 真紅の双眼と黄金の左眼（後書き）

今回で過去編は終了です。

いかがだったでしょうか？

書いていて若干涙ぐみながら、ラウラさんを暴走させてしまいました。

まあ、現在のラウラさんは色々元気なのであしからず。

そして次回からトーナメントが開催されます。

戦闘描写に悩みながら頑張りますので、是非続きもよろしく願います。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3537y/>

---

十二のBSIS

2011年11月29日21時45分発行